特 71
863

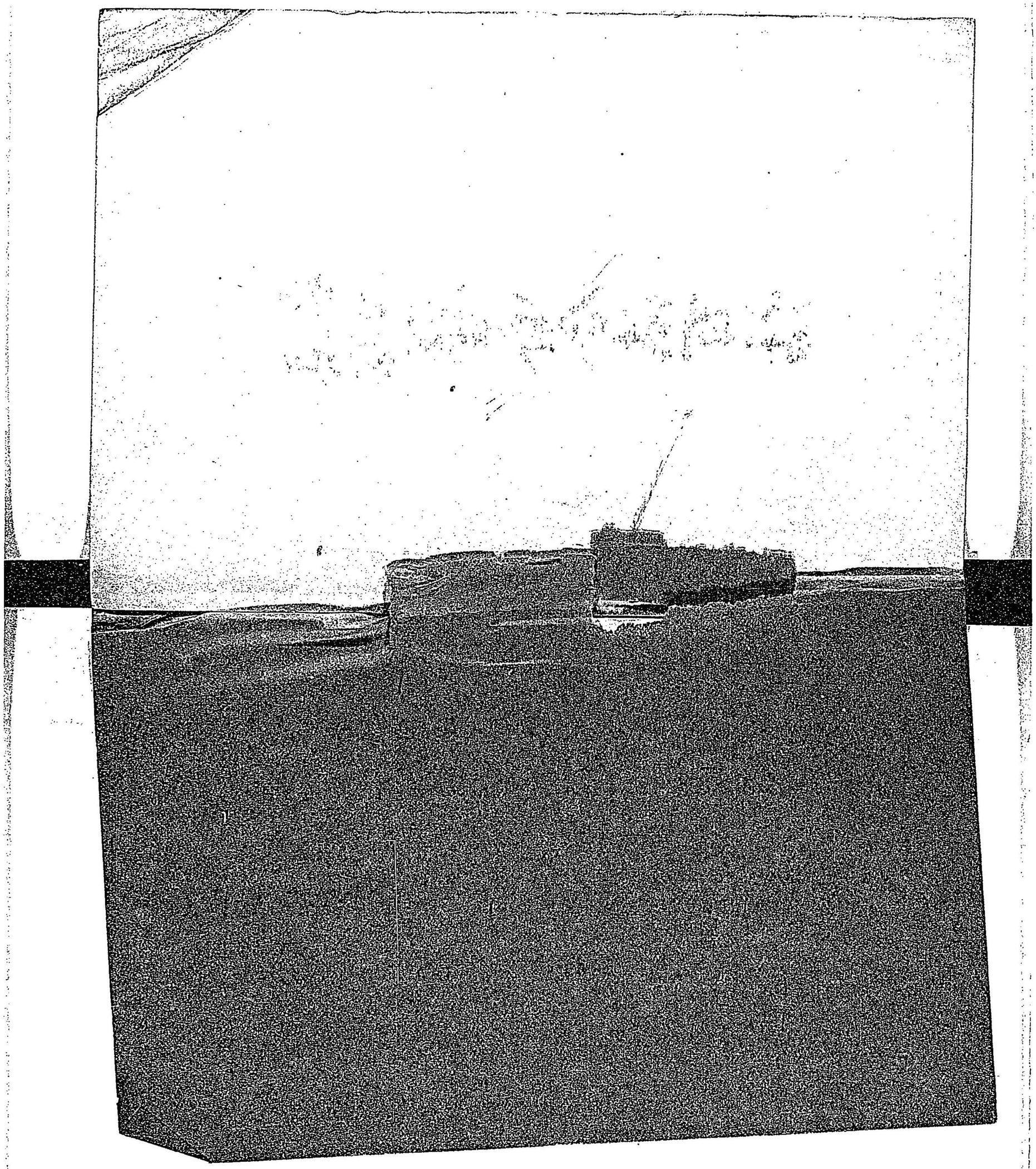
259
805

301763000-9
特71-863

真宗安心 譬喻合法百話

松田 善六

M 4 2
ABF- 61



特71
863

眞宗安心

譬喩合法百話序

佛法もとより無盡藏なり、我他力の妙法もとより不可稱不可說不可思議なり、之を說き之を教ふるに盡ることなきは其當然なるべし、說て盡きざるもの聽て盡きざるものを學び盡さんとするは至難なるのみならず、到底不可能の事なれ共、私心を離れて其法を信ずるは容易ならん、されど聽者の資格低きときは甚深微妙の法理を領得する容易に非すといふ、是亦道理なしといふべからず、是等の人には深き法理を淺き譬喩により て諭すに如かず、既に經論釋に譬喩の少なからざる蓋其所以ならん歟、今回顯道主人の請によりて豫て書冊

明
4.12.2
交内

に見知し師友に聽取したるもの一百餘條を纏め、譬喩合法百話と名けて其責を塞く、若し後者を導く一繩の一絲とならば幸甚なり矣

明治四十二年十二月

椰陰丈室鈍佛識

目次

一　我名を呼べ……一
二　足許を見るな……二
三　云ひ譯の暇に念佛を申せ……六
四　御恩を忘るな……七
五　疑ふ事出來ぬ……九
六　信の發るは他より……十二
七　務むれば上手になる　十五
八　武者修行同行の二類　十七
九　溺者を救ふに船……二十
一〇　遺言は讀ませる爲めに非す……二十一
一一　信者の心は廣く高し……二十三
一二　三品の懺悔……二十五
一三　忘れても滿腹……二十六
一四　親切らしひ申譯……二十八
一五　我心の墨に注意せよ……三十一
一六　新くも贋札は不通　三十四
一七　入らぬ積りの杖が力……三十六
一八　疑ひなしと募るは怪し……三十八
一九　信心は水中の月……三十九
二〇　氷多きに水多し……四十一
二一　唯有淨土一門……四十二
二二　犬や猿に劣るな……四十六
二三　自力の機功を募るな……四十九

二四 船中に船の構造を聞け……五十
二五 難修難行……五十三
二六 百發百中を賞せず其體の定まるを認む……五十六
二七 影によりて體を察せよ……五十八
二八 聲によりて心を知る……五十九
二九 來客の好嫌を考察せよ……六十二
三〇 病人の爲の病院……六十四
三一 凡心難測佛心……六十六
三二 佛法の眼鏡を用ひよ……六十七
三三 信心の十德指輪の三德……六十九
三四 罪の深きを知れば恩の大なるを知る……七十三
三五 南無阿彌陀佛は功德の高……七十六
三六 稱へて見れば易し 七十八
三七 稱ふれば愉快なり 八十
三八 佛恩報謝の務め……八十三
三九 第十八願は正札附の定店……八十四
四〇 女人成佛の願あり 八十六
四一 如來の御手許を見よ……八十九
四二 務めと云は氣任せならぬ事……九十一
四三 御報謝は煩惱の麥飯なら

ぬ歟……九十三
四四 御花蠟燭も御報謝の肥料……九十五
四五 勤儉貯蓄の仕上は六字……九十八
四六 他力廻向とはあちらより……百〇一
四七 信行は雲龍……百〇三
四八 煩惱賊に窮して大悲の親を懷ふ……百〇六
四九 奇なる哉佛力……百〇九
五〇 我れが使ひに我れと來にけり……百一
五一 悉有佛性と水中の月……百十三
五二 敵を慈悲に懷けよ 百十四
五三 教は淨土參の道中記……百十七
五四 宗体と黃金獅子……百十九
五五 六字の玉を知る下和は誰そ……百二十
五六 信行共に佛智の施與……百二十二
五七 信後の相續は船中の娛樂……百二十五
五八 盲目の腰拔けは我である……百二十八
五九 差上た口を佛より借用す……百三十一
六〇 六字を侮る勿れ 百三十四
六一 八人藝を爲す勿れ……百三十五

六二 助け手は利を取らぬ……百三十六
六三 華落蓮成……百三十九
六四 因果と因縁……百四十一
六五 素人には美を飾れ……百四十三
六六 六根六識は上臼下臼……百四十五
六七 法廉は稽古場……百四十六
六八 伊蘭林と旃檀の二葉……百四十九
六九 敵にも恩はあるもの……百五十三
七〇 活潑の氣象を養へ……百五十四
七一 自省して虚言を吐くな……百五十六
七二 他力とは我計度の入らぬ事……百五十九
七三 仁の端を展開せよ……百六十一
七四 鰻の説法……百六十三
七五 硝子越の聽聞……百六十五
七六 無我に法を喜べ……百六十六
七七 輪藏の功德一聲の念佛……百六十七
七八 親の世帶は子の物……百六十九
七九 聞法の因縁輕んずべからず……百七十
八〇 何處より來て何處へ往く……百七十一

八一 因果の道理に背ひて僥倖を望む……百七十四
八二 我等は六根不通なり……百七十六
八三 信專行專方專……百七十八
八四 口に積る懈怠の塵……百八十一
八五 月を見ぬ人月を見る人……百八十三
八六 大悲の攝取蛔……百八十四
八七 持物によりて行先を知る……百八十六
八八 總は春秋を知らず……百八十八
八九 味の濃淡も因果に依る……百九十一
九〇 財布と呼ばゝ金を渡せ……百九十三
九一 念佛爲本と信心爲本……百九十五
九二 緋縮緬の下著は孫娘の爲め……百九十八
九三 到着地の見ぬた歡喜……百
九四 心の花を咲かせよ……二百〇一
九五 兒島三郎高德の赤誠白書……二百〇四
九六 就人立信就行立信……二百〇五
九七 客も車夫も滿足……二百〇七
九八 あゝ往生は疑ひなし……

九九　我心を穿鑿するな……二百一十
一〇〇　無疑といひて疑ふの種類……二百一十二
一〇一　火吹き達磨……二百一十五
一〇二　溝を浚へて水を通せよ……二百一十六
一〇三　自利眞實は疑心あり……二百二十
一〇四　御恩報謝の務め心……二百廿四
一〇五　功能書の如く功能を見せよ……二百廿六
一〇六　勇氣は信心より生ず……二百廿七
一〇七　念佛の團子に心猿を懷く……二百三十
一〇八　時無別體依法而立……二百卅二
一〇九　御慈悲の絲が切れぬ……二百卅四
一一〇　信心に御慰み候　二百卅六
一一一　野菜翁と善知識　二百卅七
一一二　有るべき樣にあれ……二百卅九
一一三　他力信心は公債の如し……二百四十

以上

特71 8ね3

眞宗安心　譬喩合法百話

第三

鈍佛小泉了諦和上法話　鎖本僧默筆記

我名を呼へ

彌陀の本願ごまうすは名號を稱へんものを極樂へむかへんとちかはせたまひたるを深く信じてとなふるがめでたきことにて候ごは宗祖大師の御言であるが誠に有難ひ御言であります、我名を呼べとのたまへる親の命令が無かつたら淋しい事でありませふ、病褥に臥す子は明ても暮てもたのみになるは親ばかりであるから、お母さん〳〵と呼て居ます、我等無明淵源の大病人誰れ一人の力になるものはありませぬ、只力となるは大悲の親樣ばかり遠慮なく御親の名を呼ぶので御坐います、病子の枕元に親が居ても親を呼ふことならぬこい

はれたら淋しいことでありませふ、お母さんと呼へば八釜しひ默れと申す親で有たら、枕元に居なくてもよひと思ふて御坐いませふ、たとひ枕元に親の姿はみゑなくとも、親の名を呼べといふ言がある淋しくはありませぬ、只今臺所に用事ありて母は行くから淋しい時は呼べよといふ親の言を聞くなれば、襖障子の隔てはありながら親の近きにあることを疑はす心賑やかに居らるゝが子心てありませふ、我等は肉眼をもて大悲の親樣を拜むことは出來ませぬけれども我名を呼べとのたまふ御言を聞けば、煩惱にまなこさへられて攝取の光明みざれども大悲ものうきことなくて、つねにわが身をてらすなり、大悲の親樣の遠ざかりたまはぬ事に疑ひなく、いつも心にぎやかに日夜を送らるゝことで御座います。

第二　足許をみるな

曾て教用にて岐阜縣下の一隅を巡回いたした時、雜貨商菓子商種々の商人が附き回りた内に、輕業師一行がありて興行して居たるを、偶ま通行の途次一見しましたが十一二歳と覺しき兒童の針金渡りの最中でありました、兒童は細き針金の上にありながら足許をみることもせず平氣で居る姿勢馴れたる藝とはいひつゝも感心しました事である、其後二三日を經て夕方行水を爲し椽側に凉を納れて居りしに四十許の男が蛙の鬪ふ如くして御免を蒙りますといひつゝ近寄て申す樣、私は日々御法を聽聞仕り其間〳〵に參詣せられた方々に藝を賣て糊口を凌がせ貰ひまする輕業の營業人で御坐います、恐れ入れ共御禮申上度存し推參仕りましたと云ふを聞くに就て、過日針金渡りを一瞥して兒童の藝に達して居ることを感賞し能く足許をみずに細き針金を自由に渡らるゝことであると申したら、ハイ御素人さま

では左樣に思召すも知れませぬが、兒童にして足許をみましたら針金渡りは出來ぬので御座いますといふから、其は不審である何故に足許をみると藝か出來ぬ歟と尋ねました、左樣て御座います足許をみますと足場は細き針金にて而も一丈餘も地より離れた高き所危險でありますもの、落てはならぬといふ怖れを生し、足に狂ひが來まするへ終に落ねばなりませぬ、唯渡りますもの丶目當は針金の縛りて御座いまする樹或は杭てあります、藝人の眼は始終針金の元に離れませぬと語るを聞きながら、御他力〳〵と獨語申し傍への人から怪まれた事がありました、彼れの語りましたは、輕業の藝に就てなれども、善知識の言として聽くべき價値のある話と受取たるへはからずも、御他力〳〵と獨語を口に發したのであります、其所以は我等が後生に向ての旅程足許をみたらば彼輕業兒童の針金よりも危險

なのでありませふ、針金より落ても大地の上火にも燒けず水にも溺れはしませぬが、我等の足許は火の河と水の河であれば、一歩誤るとき水火の難を免がるゝことは出來ぬのである、斯樣の危險に怖れを生ぜず、進行せらるゝのは只事ではなひ、汝一心正念にして直ちに來れ我れ能く汝を護らむ、すべて水火の難に墮せんことを怖れざれと呼びたまふ元杭すなはち大悲の招喚が目當と成て居るのであるといふ、他力を仰ぐ助緣となつたは輕業營業人の說明である、佛法は知りそゝもなきものが知ると仰せられた、蓮如上人の御言に思ひ合せて蛙の樣に成て來た彼れも無別道故の朋友否大悲の親樣を共に親とする兄弟なりと親しむ念が發りて有難かつたのであります、一と昔の反古話なれども親近會に御緣のある友が後生と出掛てみれば何となう足許が危險なりいかゞ致しませふと御尋あるに依て、取出

して御答に代ふることで御座います。

第三　申譯する暇に稱へよ

私は御蔭さまにて我をたのめ必ず助くると仰せ下さるゝ如來の本願をば毛頭疑ひなく信じました、なれども敢て喜びが起りませぬ、稱へよと御すゝめが御座りますから稱へるは稱へますが、一向相續出來ませぬ是でも宜しふ御座いませふ歟、斯樣の問者は少なくありませぬが、斯ふいふ人にそれで宜しいと答へたらば喜ばぬのでよひ、稱へぬのでよひと決着するでありませふ歟、呑氣な信者と申すべきである、某所へ行くに通行すべき道路を歩む時は一時間餘を要しますれども、裏から牆壁を破り庭園を踏越へ行けば五分間ばかりで達せらるゝのであります、一時間も費すのは惜ひもへ五分間の方を取て進まんと思ふが宜しひ歟と申す尋ねに何と應するが至當でありませふ、たとひ宜しひと應答したるとて他の牆壁を破壞し庭園を蹂躙することが出來ませふ歟、文明國の人間としては其樣な暴舉を行ふことは出來ますまひ、出來ぬものとすれば無用の試問といはねばならぬ、彌陀大悲の誓願をふかく信ぜんびとはみな、ねてもさめてもへだてなく南無阿彌陀佛をとなふべしの御化導かくのごとく決定してのうへには、ねてもさめても命のあらんかぎりは稱名念佛すべきものなりの、御教訓を蒙むる眞宗の信徒ならば牆壁破壞の同行とならず、履むべき道を正しく進み、兎角の申し譯する暇に申さるゝ稱名念佛を口にし樣ではありませぬ歟

第四　御恩を忘れぬ樣にせよ

御稱名を怠りてはならぬと、常に心掛て居りますれども、いつの間にやら懈怠してなりませぬ、何とかして懈怠せぬ工夫はありますま

ひ歟、別に工夫と申しては知りませぬが御恩を忘れぬ樣にするのが宜しからふと思ひます、多くの人が稱へ樣怠らぬ樣と思ひ乍ら御恩を忘れぬ樣と心掛る事が少なひ樣であります、元來稱名念佛する事が何のためぞといはゞ、只單に稱へねばならぬといふのではなひ、筈であります、眞宗以外の念佛行者には淨土に往生せんため稱ふるといふのもあらふけれども、信心正因稱名報恩の定規ある眞宗に流れを汲むものならば、稱ふる心いかんぞと問ふ人に生るべからざるものを生れさせたまふ大恩に對して報謝のための稱名念佛なりと答ふる事は聽聞して知て居らるゝに相違なひ、されば懈怠してならぬと思ふより、御恩を忘れてならぬと思ふ方に重きを置たが至當でありませふ、貴方は御恩を忘れてならぬと心掛て御座るので懈怠の穴に落ることはありませぬ歟と尋ねらるゝと、恥かしや懈怠の穴往居

と申さねばならぬ、然るに稱名相續なさるゝ所をみれば懈怠の穴から出る工夫に術を知て御座るに違ひなひ、御教示下されと申した人があるが懈怠の穴から出る術は知りませぬけれども、懈怠と氣が付たとき其まゝで御恩を仰ぎ稱ふるのであります、畢竟穴の中で相續いたすので御座います。

第五　疑ふ事出來ぬので有る

疑ふてはならぬ怪んではならぬと、骨折ても相手の心を知らずに疑怪の心が晴るゝものではありませぬ、大悲眞實の親心を知らずして御本願を疑ふてはならぬ、後生を任せねばならぬといふは大なる間違であります、對手が眞實ならば疑ふ事出來ぬのであります、胸間に十數個の勳章を閃かして居る人にも渡すことの出來ぬ實印を、襤褸を纏ふた出入の老夫に渡して心配せぬのは何故であらふと餘所目

よりは不審に思はるゝけれども、敢て不審に思ふには及ばぬ、勲章はいかばかり閃きても、心底の分らぬ、人に大切なる實印は渡されなひが襤褸は纏ふても眞實の心ある事の分つた人には實印も大金も心配なく渡されます、是は渡す方に疑ふてならぬと骨折て心配なく渡す事に成るのではなひ、對手の人が身形こそ襤褸を纏ふたものなれ心底の清廉なること水晶の如く一點の曇りなく、五十年來一日の樣に出入して用を勤むる眞實に疑ふ事出來ぬのでありませふ、聽てもく疑ひ晴れぬといふは大悲眞實の御親を出入の老夫に劣る樣に思ふたに違ひなひ何と畏れ多き事でありませぬ歟、無始より已來乃至今日今時まで穢惡汚染にして清淨の心なく虛假不實にして眞實の心なき我等凡夫を深くあはれみましく〳〵て一念一刹那も清淨ならずといふことなく眞實ならずといふことなく、五刼兆載永刼の間御思

惟御修行遊ばして御成就御圓滿なされたる本願名號を聽聞して、一念の疑心なきに至るのは疑ふてならぬと思ふ我等のはからひが間に合ふのではなひ、一々願言爲衆生故の大悲眞實に對して疑ふこと出來ぬのであります、我宗祖大師は信心といふは如來の御ちかひをきゝてうたがふ心のなきなりとのたまひてあれども、疑ふてならぬと骨折で心配なきに至りたが信心なりとは仰せられてなひのです、唯信鈔に信心といふは深く人の言をたのみて疑はざるなり、たとへばわがためにいかにもはらくろかるましく深くたのみたる人のまのあたりよく〳〵みたらむ所を教へんにその所には山あり、彼所には河ありといひたらんを深くたのみて、その言を信じてん後又人ありて其はひがことなり、山なし河なしといふとも、いかにも虛言すまじき人のいひてしことなれば、後に百千人いはんことをば用ひずもと

き丶しことをふかくたのむ、これを信心といふなり、今釋迦の所說を信じ彌陀の誓願を信じて、ふたご丶ろなきこと又かくのごとくなるべしと述べてあります、何れより考ふるも信ずるといひ、たのむといふ疑心なき領解は我計度をはなれたる他力にして疑ふてはならぬといふ如き、我思ひの間に合ふものにあらず、大悲眞實の强きに降參し疑ふことの出來ぬのであります。

第六　信は外より入る

光明の緣にもよほされて、宿善の機ありて他力の信心といふことをば今すでに得たりこれしながら彌陀如來の御方よりさづけまし〳〵たる信心とはやがてあらはにしられたり、故に行者のおこす所の信心にあらず彌陀如來他力の大信といふことは今こそあきらかにしられたりとは蓮如上人の御教訓にして誰れも彼も耳なれて居る御

言でありませふ、是等の御言を聽聞するものに信心製造家の出來る筈はなひのであるに、他力の門外へ走り出て信心を製造せんと企圖するものが多くある樣で御座います。

喜んで見たひものである或は悲んでみたひものであると希望したとて希望した爲に喜ばれたり悲まれたりは出來ぬのであるといふ事は理の當然でありませふ、偶ま旅行先に於て電報が來ましたと旅店の下婢が持來りた電報用紙を開封すれば母危篤直く歸れと書て有た、之を讀で悲むまじと希望しても悲まずには居られますまひ『泣くは我れ涙の種は向ふからと』古來申す通りでありませふ、又國許發足の當時感冒のため學校を休業して居た愛兒今日では全快した歟未だ全快せざる歟と日々夜々心配した旅行先にて受取た郵便片假名のみを以て認めた愛兒の自筆、父上樣御安心下され、今日より學校へま

いりますと記して有た之を讀み下した時は何と喜ばずに居られませふ歟喜びの餘り嬉し涙に男泣きの聲を揚るだらふと思ひます、悲みも喜びも自ら製造したのではなひ、悲ませる種は外より來たのである、喜ばせる種も他より入たのであるといふ事は明かでありませふ本願を信じて喜んで見樣、彌陀をたのみて安堵したひといかばかり希望したとて意の如くなるものではなひ、乃て佛說の電信を受取て讀み下せば忽ちにして信心歡喜する事が出來るのであります、自身が讀めなひものは他人に讀でもらふが宜し我等も讀めなひ一類であるから蓮如上人に讀で頂きませふ、蓮如上人は聲高く阿彌陀樣の電信を讀み上げて下さるゝを謹んで聽聞いたしませふ、阿彌陀如來の仰せられけるやうは末代の凡夫罪業の我等たらんもの罪はいかほど深くとも我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしと仰せられたり

と是が電信であります、讀み違ひのなひ蓮如上人に讀で頂ひたのですから間違のある道理はなひ、間違ひのなひ阿彌陀如來の電信を間違ひのなひ蓮如上人に讀で頂き聽聞したものが信受出來ぬといふ道理はありますまひ、受け心の有無や喜び心の厚薄に彼是喧嘩して居るのは他人の電報用紙をみて是はたの字に違ひなひ否ぬの字に違ひなひ是はみの字なり否しの字なりと爭ふの類にして自身に未た電信を受ぬ人に相違ありませぬ。

第七　務むれば上手になる

文章にせよ漢詩にせよ和歌にまれ俳諧にまれ天窓から名人や達人は出來なひのです務めて上手になるので御座いますから御恩報謝の稱名念佛も務めて上手にならふでありませぬ歟信は大悲の佛智にすがり報謝は行者のあつきおもひをはげむべきものなりと先德の御教訓

に仰せられてあります信はもとより佛智他力の御もよほしなれば我等が務めて得らるゝといふものではありませぬけれども報謝の稱名念佛は務めて稱ふることが出來ぬので御座います、彼酒好きの爺さんが少しは呑だがよひ食物の消化を扶くるからと幼兒の唇を酒もで濕ほすときは顏しかめて居たのなれども、成長するに隨て酒を呑む事に務めて上手になり、食物の消化位に止まらず家屋も土藏も公債證券も田地山畑までも消化させる樣なものがあります、此樣な上手仲間には成てもらふてなりませぬが「今日ばかり思ふ心を忘るなよ昨日は過て明日はなき身そ」の心より今日一日は御報謝の稱名念佛相續しませふと務めてすゝみませふでなひ歟、一日〳〵といふは短き務めなるが積りて一月となるときは三十日と申す長き時間になるのです、斯樣に一ヶ月より二ヶ月と務めて行けばいつとなく上手となり、至心信樂已れを忘れてねてもさめてもへだてなく南無阿彌陀佛をとなふべしの御勸めに符合する樣になられます。

第八　武者修行同行の二類

世に後生願ひといふ評判高き人達の多分は御法義の武者修行で御座います、武者修行といふものはいかなるものならんと申すに、現今の御方には御分りのなひ方もあらふ、道人等も話傳へに聞て居るのです德川幕府時代に擊劍家が諸國を回歷し名ある擊劍家と劍術の技を競べ敵手を落して勝ちを取たるを道場破りと申して威張りたさうです、今の世の後生願ひといふは名ある同行を各處に訪問し、曾て聽聞せし文々句々の記憶を持ち出し法義の競爭を爲し勝ちを取たるを同行頭と稱するのであるから、所謂武者修行同行と申すべきもので御座います、此外に又絕對の武者修行があります、其はいかなる

もの歟と申せば敢て法義の沙汰もせず、只佛恩の廣大なる事を仰ぎ稱名念佛しながら十信の菩薩に太刀競べをして居ります、十信の菩薩は佛道に入るには遙遠なりと申さるゝに對し自ら喜ぶ樣我等は一念歸命の時、攝取照護の大益を蒙むり娑婆の緣盡るを待ち、淨土に往生し往生卽成佛の果報とは仕合せ者なりと此に於て菩薩は降參なされます、十住十行十廻向十地と總ての菩薩方多少の段違ひ位違ひはありても、横超他力の大益を蒙りたる念佛行者に勝ちを得たまふ方はありませぬ、乃て五十段の菩薩か何れも降參なされた上は肩を比べ太刀競べを試むべきは彌勒菩薩ばかりである、四十一段に登られた初地の菩薩は正定聚なれども佛になるまでの年限を御尋ねすれば、二大阿僧祇と御答へなさるは必定なり、彌勒菩薩に御尋ね申せば補處とありて次生が佛であるとは御答へがあれども其次生が百年

や千年ではなひ五十六億七千萬年と聞けば次生といひつゝ程遠ひことである、我等は五十年六十年最も世に類のなき長命といはるゝのが一百歲に超るは稀で御座います、殊に老少不定ときけば明日を待たず今夜否只今にも娑婆の緣つきぬれば、其時が彌陀同體の佛果である、斯樣に勝ちを得らるゝが眞宗念佛の行者なれば同じ武者修行となるなら前者を取らず後者を擇び取らねばなりませぬ、和讃に五十六億七千萬彌勒菩薩はこしをへんまことの信心うるひとはこのたびさとりをひらくべしと御述べなされてあるを頂けば、愈よ我等の勝算に定りました次第で御座います、有難ひ事であるまひ歟、前者の如き道場破りは自力を以へ勝を得て誇られもし樣けれども、我等は全然他力によりての勝利なれは誇る事は出來ませぬ、ひたすら佛恩の廣大なるを仰ぎて報謝いたさねばならぬ、其聲は十方世界へ響き

十方の如來樣より讃嘆を受け且守護をも蒙むることは思ひよらぬ仕合せ者で御座います。

第九　溺るゝ者を救ふに舟

生死の苦海ほとりなし、ひさしくしつめるわれらをば彌陀弘誓のふねのみそのせてかならずわたしける彌陀觀音大勢至大願のふねに乘じてぞ、生死のうみにうかみつゝ有情をよはふてのせたまふ、此二首の和讃は生死海に沒溺して永く浮ぶ事の出來なかつた、我等が慈悲の御親の救ひにあづかりて、彼岸に達する他力本願の御手柄を御知らせ下されたのである、河流に落た子が可愛とて水を知らぬ泳ぎも出來ぬ親が飛込で共に溺死したといふ例も世に少なからぬ事で御座います、早世したる子や孫が不憫なりとて供養をする施餓鬼を行ふ是も子のため、是も孫のためと煩惱中に雜毒虛假の業作を運び自

身の後生を打忘れて居るものは水泳ぎ知らぬもの丶河流に飛込だものと齊しく共に浮ぶ瀨はありますまひ、其樣な下手な手段は止めにして、水に落たるものを救ふには舟の準備に如くものはなひと心得周章狼狽せぬが宜しひ先立ち子や孫を案じたら速に大悲の願船に乘じ普賢大悲の益を得て、一人や二人の孫子に限らず一切衆生を救ふが宜し、安樂淨土にいたるひと五濁惡世にかへりては、釋迦牟尼佛のごとくにて利益衆生はきはもなしと和讃にも御述べになりてあります、何と愉快でありませぬ歟、準備のある水上警察でも救ひ舟を出すに五分や十分の時間を費します、今彌陀大悲の願船は一念歸命と早き乘り込みが出來るので御座います。

第十　遺言狀は讀ませる爲に非す

世尊說法將了時慇懃付屬彌陀名とは無問自說の師陀經卽是一代の結

經は釋迦如來の遺言狀であるといふ事を善導大師が法事讃に御釋なされたので御座います、是は讀だばかり辨じたばかりでは彌陀名附屬の所詮はありませぬ、亡父の遺言狀には職業に勉勵せよ衣食に節儉せよ、宗教を信仰せよ人道を履行せよ、長者を尊敬せよ下級を憐愍せよと記してあるのを日夜に繰返しても讀だのみ覺へたのみ、いつも怠惰に流れ驕奢に走り信念もなく道義もなく、暴戾の擧動に渡りて居ては亡父の素意に叶はぬといふ事は分り易き道理で御座いませふ、大經に一念大利無上功德と說き觀經に汝好持是語持是語者卽是持無量壽佛名と說き彌勒阿難に付屬したまふものゝ佛意は信ぜよ行せよにあるのであります、たゞひ日々三部經を讀誦するも、年々三經を講釋するも、之を信じ之を行ぜざれば彼遺言狀を繰返しつゝ放蕩無賴に一生を過すと同然であります、亡父の遺言狀を用ひざる放蕩息子は今生眼りとすれば、五十年歟六十年なれども、如來の遺言を御用ひ申さぬ過失は一世に止まるのではなひ、未來永劫に及ぶのであるから御用ひ申して悔いなき樣いたしませふ、宗祖大師はやわらかく說明して下された、和讃に彌陀大悲の誓願をふかく信ぜんひごはみな、ねてもさめてもへだてなく南無阿彌陀佛をとなふべしと、心易ひことでありませぬ歟。

第十一　信者の心は廣く高し

明ても暮ても何ごとした仕合せ者や南無阿彌陀佛〳〵ご夏の日に暑しといはず、冬の日に寒しといはず雨にも風にも只何ごとした仕合せ者や南無阿彌陀佛〳〵と稱して明し暮して一生を終りた信者が有た事を聞た、いかにも然るべきであらふと思ひます、人間の立身や出世の極は門番の子息が大臣と成たり、周圍八間の小屋に產湯を浴た身

が何百萬圓の富豪と成たといふの類である、若し人間といふ階級を十界中にみるときは第六番目にありて其中の小階段に於て、上下優劣を云ふのみ、信心決定の身は形こそ娑婆終るまで替らぬ超世の悲願きゝしより、我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ、已に正定聚の菩薩である、菩薩は十界中の第二番目にして五十二段といふ階級から申せば正定聚は十地中の初地位にて、歡喜地であります、又空有相卽に達する邊より云ふときは、信者の位置か八地以上と申されます、又次生が佛といふときは正覺に隣れる彌勒と同きものと申されるのであるもの、短日月の浮世の中にて世帶の大きひ者や位官の高ひ人を羨む樣な、蟻の肝を八裂きにしたる如き小希望はなひ故、信者の心は廣くして高してある乃て何とした仕合せ者や南無阿彌陀佛〳〵で、明し暮す事が出來るに相違なひのです、信卷に極惡深重の衆生大慶喜心を獲れは、諸の聖尊の重愛を得ると仰せられて御座います新聞紙上に譽めらるゝ位は水上の泡であります。

第十二　三品の懺悔

通佛法に於て懺悔せんとするときは、身の諸の毛孔より血を流し眼中亦血を出すのが上品の懺悔にして、又身徧く熱し諸の毛孔より汗を出し、眼中血を流すのが中品の懺悔である、身徧く熱し眼中に涙を流すのが下品の懺悔であります、我々は試驗に臨み能驗者の嚴格なるに對し、平素の不勉强を恥ぢ落第してはならぬぞと腋下に冷汗を流した事はあれども、佛に對して造罪を恥ぢ顏赤くした覺へもなひもの、何ど三品の懺悔が出來る時が來ませふ歟、否々善導大師が禮讃に卽是久しく解脫分の善根を種る人なりと釋したまひてあれば

三品の懺悔も因縁なくしては出來ぬのであります、飲食が過ぎたら胃活を呑め煩悩が起りたら懺悔を爲せと某法師はいはれたと聞けども、我々に於ては胃活は呑めるが懺悔は爲せぬので御座います、然に禮讃に流涙流血等を爲す能はざれども但能く眞心徹到するものは卽ち上と同じと釋し、又念々相續して畢命を期とするもの十卽十生百卽百生なり何を以ての故に外の雜縁なく正念を得るが故に佛の本願と相應するが故に等と釋したまひてあれば、嬉しきことでありませぬ歟、宗祖大師はやわらかく和讃に眞心倒到するひとは金剛心なりければ、三品の懺悔するひと、ひとしと宗師はのたまへりと仰せられました有難ひことで御座います。

第十三　忘れても滿腹する

私は何といふ愚鈍な事で御座いませふ、此年になるまで長々の年月

を毎日の樣に御聞かせを蒙むりながら、何一を覺へた事がなひのですと歎く人がある、何一つ覺へがなひので未來を案じます歟といへば、いゝ〳〵かねて御本願の不思議にたすけられて往生させしめもらふ事と聽聞致し御慈悲の親樣に抱かれた心地にて居れども只聽ても忘れ聞ても忘れ何一つ覺へのなひが恥かしひといふ話である某所に自身の名も覺へられぬ愚鈍な者がありまして、或店に腰を掛けて餅を喰ひましたが、喰た事を忘れて次の餅を喰ひ、又忘れては次に手を出して喰ひましたが忘れながら、喰た餅に腹を滿たして行たといふ事を聞きました、されは長々の年月御法を聽聞して何一つ覺へはなくとも、御助けの御本願に腹が脹れて、往生いかゞの思ひなければ敢て歎くに足らぬでありますまい歟、世の中には他人の喰ふ餅を算へて幾個喰ふた喰はぬの論に時間を費し、或は幾個目に腹が滿

たした歟の吟味を遂ぐる樣な佛法者が多ひ樣に考へられます、其中に於て忘れては喰ひ忘れては喰ふた餅に腹を滿たした如く、何一つ覺へぬながらに、滿腹した御信心いよ〳〵他力の御もよはしと喜ばるゝことで御座います。

第十四　親切らしひ申譯

皆さんは私の云ふ事を能御聽聞した人なるに御念佛相續の風がなひあれでも信ぜられたのであらふ歟と仰しやりますが、私は常に腹の中にて御念佛申して居ます、其は何故と御尋問があれば御答へ申上ますが、聲に出して御念佛申しますと誹謗するものが有てなりませぬ、誹謗した罪は誹謗した者の被ぶるのであるから、搆ふ事はなひといはるゝ方もあれども、私は他人を罪に落してはならぬと存じまして、聲に出さぬ樣心掛て居りますといふ信者がある、成程此申譯

は親切らしひ申し譯と評せねばなりませぬ、蓮如上人の御時代四面楚歌の聲といふべき當時さへ人ありて何宗ぞと相尋るときはしかと當流念佛者と答ふべからず、只何宗ともなく念佛ばかりは尊とき事と答へよの御諭しでありて、聲に出すなといふ御諭しはなひのです今日の世に誹謗する人といふはなひと申してよからふ、たとひ有ても少數である、又腹の中にて念佛するといふが大きなる誤りであり て、實相念佛觀想念佛觀像念佛なれば口に關係なけれども、稱名念佛といふは口に稱ふるに限るのである、其知れ切たる事ながら他の三種の觀念の念佛に紛れぬ樣にとて、蓮如上人は聲に出してと御懇示なされた所もあるでなひ歟、身をすて〻望みもとむる心より信はうべしとの御教訓もあるが、親切らしひ申譯する御方は他人が誹らぬ先に自身が他の念佛者を誹謗なされ度のであるまひ歟、實際生る

丶筈でなひ身の上を淨土へ生れさせて下さる丶といふ御本願を信じて如來の御恩を知たならば、親切らしひ申譯は入るまひと思はれます『白浪の名をば立つとも芳野山花にはすつる身をば厭はじ』といふ歌は西行法師が讀まれたのでありますが、此歌をよまれた原因は櫻花の盛りにみとれてはからずも一枝を折去んとする時、見咎められ名乘たれども名を詐はるものとして許さず、全く西行ならば和歌の達人なると聞く故一首を詠ぜよといはれたるに由て出來たので有たと申す事なり、歌意は盜人と呼ばれてもよひ、花の盛りに惚れ込だ身は花にすて丶惜くなひといふ心である、法然上人は御左遷にならせらる丶といふ御出立の節にさへ高く御念佛遊ばして御止め申上た御弟子に對し御氣色變へて身は八裂になるとも佛恩の稱名は廢せられぬとの仰せが有たでありませぬ歟、櫻花にさへ惚れ込で捨る身を惜まぬものがあるもの御本願の花にほれこんだが誠なら御恩報謝の稱名念佛に遠慮しては居れまひと思ひます、眞劍に成て御法を聞て貰ひませぬと似て非なる信徒が出來でなりませぬ。

第十五　我顏の墨は自らみにぬ

有形と無形とを對照すれば前者は見易く後者は知り難ひといふは、萬口一樣に述る事でありませふ、一婦人が通行する途中遇ふもの丶多くが皆くすくす笑ふて過ぎ去るので、甚だ心地よからず自ら身の前後をみれども塵一つ附著しては居らぬ、何故多くの人が笑ふのであらふと思ひつ丶進みしに、懇意なる老婦ありて袖曳止め屋內へ案內し、銅盥に湯を汲み貴女の御顏に墨の汚れがあります、御洗ひ遊ばせ決して虛言は申しませぬ、これ御覽なされと鏡を持來りたをみればペッタリと附着してある、顏の墨が見にた其時の喜び其時の恥

かしさ何とも喩へ様がなひ、而して老婦の親切に感じ嬉し涙に暫時顔を揚げにくひ位である、夫程醜事を知らせて貰ふて喜んた婦人に貴女は萬事拔目のなひ方なれども、義理ある御養父母大切なる御良人に對せられて慳貪であると世間の噂がありますの噂さのみなれば宜しひけれもど、萬一事實で有たなら、將來に取て御爲めになりませぬから、何卒柔和になさる様と云ひ掛ると、全然いひ終らぬ内に顔を赤くし聲を震はして、御親切は有難うといひすて、蹴立る様に其場を去て仕舞ふといふが多からふと思ふ、顔の墨を知らせてもらふて喜ぶ事は知て居ながら、心の墨を知らせて貰ふて喜ぶ事を知らぬといふは何の所以でありませふ、是は無教育に由るのであると申し度が世には教育のある婦人に右等の類が少なからぬ故に、一概に無教育に由るとも片付る事が出來ませぬ、乃て宗教といふ何れの方面

に向ふても圓滿ならしむるものが必要であります、他の宗教を今は論じませぬが我信仰いたして居る佛教は實に奇妙なる法であります實に不可稱不可說不可思議であります、もとより轉迷開悟拔苦與樂の大法にして無始無終に貫通する眞理なれば、其德の廣大なる事は申す迄もなひ事ながら、繰返し〳〵讃嘆したてまつらねばならぬが佛教である、佛教を信ずればいかなる德が具はるぞと御尋ねなさる方もありませふが、此様な德であると團子を懷中より出してみせる様な事は出來ませぬが佛と共に進退し佛と共に寢起し佛と共に勤勉するといふ様にいつも佛と離して居らぬ事を感ずるので、自身ながら合點の行かぬ程氣は高尙になり心は廣大になり、窮屈の念更に起らぬ事になり、他人の言を容る〳〵に吝かならず、明かなる鏡に向ひつ〳〵あるが如く、是を是とみると同時に非を非とみる事が出來嬉く

もあり、恥かしくもあり事々物々く敢て飾らず、敢て繕はず有のまゝにて世を渡らるゝといふ仕合顔の墨を知らせて貰ふた恩を知れども心の墨を知らせて貰ふた恩を知らぬといふ樣な偏頗はなひ事になります、他人が知らせて呉れたと思ふ故、偏頗心が起るけれども、佛が知らせて下さつたと思へば私なき鏡の長を長とし、短を短とし佛も鬼も其まゝ寫す如く偏頗に聽く事は出來ませぬ、さりながら信ぜずに妙味を知ることは叶ひませぬ。

第十六　新しくとも贋札は不通

稱ふるは稱ふれども、有難みが薄ひ尊さが淺ひので御座います、何としたら宜しからふと有難さの厚からぬを心配し尊とさの深からぬを苦心する人も世に少なくありませぬ、此樣な人が有難さや尊とさが深厚に成たらば如來樣の御恩を全然忘るゝてあらふと思ひます、

何故なれば自ら望んだ思ひの遂けられたので滿足する道理である、御恩報謝の稱名念佛を申す、心の方は有難ひ時もあれば否らざる時もあり、揃はねども稱ふる名號に替りはありませぬ、新しき折目まみゐぬ、十圓紙幣ど揉めて皺に成たのみならず、破れて離れんとする繼目へ膏藥を貼た樣で三つも四つも裏から切紙もて繕ふた紙幣と並べた時は誰れも揉めなひ方を取るであらふ、けれども新しき方が十二圓に通用も出來ぬ揉めた方が八圓とはいはぬ、新舊に拘はらず共に十圓に通用するに相違なひ、折目なき紙幣も贋札ならば五厘にも取りてはなひ筈、御恩報謝の稱名念佛に有難ひ時と有難くなひ時とありても、心配は入らぬ、稱名念佛は御恩報謝に相違なひのでいかほど有難ひばかり嬉しひばかりに成ても、斯樣に成たからいよ〳〵往生に間違なしと思ふ樣な御安心なら贋札へ有難さはいかほ

ご續ても報土往生は叶ひますまひ、信の上は何と思ふて稱ふるとも念佛すれば佛恩報謝になるなりとの御教訓があれば、揉めながら通用が出來るものと心配なく稱へて下さひませ。

第十七　入らぬ積りの杖が力

助業を傍らにして正業を專らにすべし、正業とは佛名を稱するなり佛名を稱すれば、必ず往生することを得る佛の本願に依るが故にと法然上人は仰せられてあるのに、聽聞不足の人は稱名念佛を不足に思ひ助業を力にたのむ樣である、助業とは讀誦、觀察、禮拜、讃嘆供養の四正行である、改邪鈔には正定業たる稱名念佛をもて往生淨土の正因とはからひつのるすら、猶以て凡夫自力の企てなれば、報土往生がなふべからずと、嚴しく仰せられてあれば、況や助業をやであると知りつゝ助業を力にするものが多ひから、注意致されば杖は宜しひよといふ意底には未だ其樣に弱らなひそといふ痩我慢是見よかしに杖なしに出掛たのであるが、老人自らも是まで杖もて歩行すれども、敢て力に成たと思はなかつたゆへ、入らなひと判然斷はりて出掛たに違ひなひ、然るに十歩や二十歩の内は氣も付かなかつたが、一町餘も進てだら腰が痛くなり、膝ががく〳〵し出しア、杖を以て來ればよかつたにと、豫て力にせぬ積りの杖が力に成て有た事が分つたといふ話がある、助業を力にせぬ積りの念佛行者が日々〳〵參詣した寺へ參れぬ樣になり、日々御内佛の御給仕した身が出來ぬ樣に成る時に、此樣な事ではそろ〳〵往生の膝ががく〳〵し出し、信心の腰が痛み出すのでは力にして居らぬと思ふた助業が杖に成て居たのではあるまひ歟。

第十八　疑はぬと募るは怪ひ

信心といふは如來の御ちかひをきゝてうたがふこゝろのなきなりと申すは如來の御力には、我宗祖大師の御教訓にして疑ふ心のなきと申すはからはれて生るべからざるものが、淨土へ生れらるゝ事に安心し案した後生に心配の離れて是で善ひ歟惡ひ歟、自らの計度盡た所でありませふ、然るに世の信者といはるゝ人に御本願を疑はぬ〳〵と頻りに募るのがある、いかゝでありませふ餘り疑はぬと募るは怪ひ樣に思はるゝ何故なれば臆病人が夜道して此邊に人魂が出ると聞たが、今夜は出ぬ歟何出たとて恐ろしくはなひ、何も恨みを受る樣な事はなし、更に恐ろしひ事はなひ〳〵と獨語して居る、時には全身に粟を生し髮の毛は竪て仕舞ふて居るのである、恐ろしくなひのが本當なら怖ろしくなひといふ世話がなひのみならず、更に氣も付き

はせぬ筈であります、恐ろしくなひと口に出たのが恐ろしひ心の現はれたのである、眞實信心決定したのが本當なら其樣に疑はぬ〳〵と募らずともよからふであるまひ歟、本願の不思議をもて生るべからざるものを生れさせたまふ、橫超他力に滿足したら疑はれぬ事に成たのであるから、疑はぬ心に氣も付きはせぬ、只廣大の御恩を仰ぎ今日の仕合を喜び御報謝の行屆かぬを慚愧して稱名念佛するばかりであらふと思ふ、恐ろしくなひと募るは恐ろしひ最中疑はぬ〳〵と募るは怪ひ信者と申さねばなりませぬ。

第十九　信心は水中の月

記憶の强ひ聽聞連中は三人寄ると信心の話を持出し甲論乙駁、我他彼此と正邪善惡の喧爭に中裁を要する樣の事は到處見聞します信心といふものが一個の固體物なれば、之をみよと眼前に並べる事も出

來樣けれども、左樣に行かぬのが信心であります、多くの人が學問と信心とを混雜して居る樣です、自力の宗義は且らく措て問はず、他力の宗義に在て信心と申すは他力廻向のものなれば、此方に握る物があるのではない、仙厓和尚の讀れた歌に『降る雪を手に取りみれば消るなり空にふらせて我物にみよ』といふがある、一寸他力信心を味ふに便りある三十一字と思ひます、最要鈔に信心といふ二字をまことのこゝろとよむ上は凡夫の迷心にあらず全く佛心なり、この佛心を凡夫にさづけたまふときの信心とはいはるゝなりと仰せられてありまして、他力の信心は佛心であります、佛心は天上の月の如く信心は水中の月の如しと申してよからふ、水中に月あれども水に生した月でなひから水中を探りたとて握ることも捕へることも出來ませぬ、握るも捕へるも出來ねども水中に月なしとはいはれませぬ

我等が胸を幾千年探しても信心を握ることは出來ぬ、握られませぬけれども信心は正にあるのであります、阿彌陀如來の我等を助け度救ひ度の御慈悲のまゝを、彼是云はずに御受して往生を待つ歡喜は我でなひ、全く佛心のあらはれて御座います。

第二十　氷大きに水多し

無始以來造り置たる我等が惡業煩惱をのこるところもなく、願力不思議をもて消滅する由れあるとは、常に我等が聽聞して居ます所の有難ひ御言で御座います、畢竟惡業煩惱の負債は彌陀法王に負擔して頂き、功德利益の財產は彌陀法王に頂戴して領するといふ道理であります、實に此上なき幸福者は我等凡夫であるまひ歟、一切衆生に對して一々惱煩の負債を引受たまふ、大悲の御手許に功德利益の減りませぬのは、いかなる所以でありませふ、世間では一千圓負債

のある家へ一萬圓持參して入る人あるとも千圓を償還すれば一萬圓は九千圓となりて減ずるは勿論なれども、彌陀法王の惡業煩惱貪擔の方法は熱湯中へ氷塊を投入する樣なものにして、ぬるくする筈の氷塊は忽ち熱湯の量を增すのみ、聊も湯のぬるくならぬは火の盛んなる所以であるといふ事は分り易き道理でありませふ、今も慈悲の熱湯は煩惱の氷塊を投ずれば投ずるに隨て益々多量になりますので聊も功德善根を減却せぬのであります、減却せぬばかりではなく慈悲の熱湯の冷へざる所以は智慧の火の盛んなるに由るものと信ずべきで御座います、和讃に罪障功德の體となり氷と水の如くにて、氷おほきに水おはし障おほきに德おほしと仰せられたるを拜讀すれば一層明かに味ひが分ることであります。

第二十一　唯有淨土一門

それ聖教萬差なり、何れも機に相應すれば巨益あり、但末法の今の時聖道門の修行に於ては成すべからず、則我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者といひ、唯有淨土一門可通入路と云云　これみな經釋の明文如來の金言なり、然るに今唯有淨土の眞說に就てかたじけなくも、かの三國の祖師各々この一宗を興行す、このゐへに愚禿すゝむる所更に私なし、然るに一向專念の義は往生の肝腑自宗の骨目なり」とは御傳記下の第五段に御引用なされた我宗祖の御言であります、釋迦如來御一代の御說法は何れも轉迷開悟の大法なれば御指導の如く務むれば大利大益は得らるゝのであります、されども末代と呼ばるゝ今日に根機の拙劣なる我等が御指導の如く相應する事が出來ませぬ、其所以は大聖釋尊が既に大集月藏經に我末法の中の億々の衆生は行を起し、道を修すとも未だ一人の得者あらずと說きた

まひてありて、聖道門の難き事が明かに分る、七高僧の第四道綽禪師は安樂集に唯淨土の一門のみありて通入すべき路なりと御釋なされてあれば、淨土門の易き事が明かに分る、たゞ淨土の一門ばかりは貴賤老幼智愚善惡古今に通して行かるゝ眞說に就て龍樹天親曇鸞道綽善導源信源空の七高僧が眞宗を興行なされたのを信受奉行して親鸞は勸むるのであるから、更に私はなひぞよ何卒彌陀の本願を信じて念佛して吳れ、此外に餘行餘善を求るなよ、一向專念の義は我等が往生の肝腑である、眞宗の骨目であるとの思召で御座います、然れば餘宗餘門を誹謗したり擯斥したりしてはなりませぬ、何れも釋迦如來の敎へによりて開かれし宗旨にて、機に相應すれば利益ある宗旨なり、我機に相應せぬ宗旨と知らば信行せざるまでの事である、有緣の人の信奉するのを誹謗してはなりませぬ、幾百段の織物

の中には絣あり縞あり友染あり小紋あり、地合にも絹地あり布地あり毛類あり、綿類あり甲は好んでも乙の嫌ふもあり、乙は嫌ふても丙の好くあり丙は好でも丁の嫌ふあり、苦集滅道の四諦は聲聞の好む毛織物なり、無明行識等の十二因緣は緣覺の好む小紋物なり、布施持戒等と六波羅密は菩薩の好きな友染縮緬なり、我々は自身の力にては天上に流行の十善木綿絣も手に入るゝ事の叶はぬ、無錢否無善の凡夫なれども、五乘齊入萬機普益の親たる、彌陀法王の御慈悲によりて、聲聞緣覺の二乘は勿論、大乘菩薩の高位の方々さへ及はぬ所の、弘願の妙法眞實之利の美服を得て佛菩薩を友とし遊ぶといふ仕合、御恩を忘れてはなりませぬ、和讃に他力の信心うるひとをうやまひおほきによろこべば、すなはちわが親友ぞと、敎主世尊はほめたまふ、如來大悲の恩德は身を粉にしても報ずべし、師主知識

の恩德もほねをくだきても謝すべしと仰せられてある。

第二十二　犬や猿に劣るな

世に睦まじからぬ間柄を呼で犬と猿の樣であると申すのは、中の惡ひに相場の定りたが犬猿ごみゐるでありませぬ歟、その犬猿でさへ教への下に中よく藝を務めるとすれば、人として睦まじからぬ事ありては恥かしき次第でありませぬ歟、犬の脊に猿が跨り一の谷の演劇するを見た事もあります、實に感心である、今春戊申詔書布演のため江州佛教同盟會に出張して、數日間處々に御話を致せし時乘り回りた腕車の先曳が犬でありました、少々高みへ向ふ道路には四足をふみはり息まく樣子は、全然人間の注意する姿勢に異らず坦途を走るにも穴を避き石を遠ざくるに心を用ゐるのが自然と居動にあらはるゝをみて、犬とは思へぬ位でありました、此先曳は何時頃より

使用する歟と車夫に尋ねましたら、四年前より使用いたしますが能く云ふことを聞て呉れますので如來樣の大恩を仰ぎますと申すゐへ其は何故ぞと尋ねたら犬でさへ云ふ事を聞くのに、此奴は永々の間大悲の親樣の云ふ事を聞かずに居たことで有たと恥入りて、南無阿彌陀佛を稱へますと、述べながら感涙に咽んで、頭を揚兼ましたので共に慚愧いたした事で御座います、蔭にて彼畜生と自身の名を耳語するを聞かば何をもて畜生といふ歟、其由へを語れと押問答し且遺恨を含み時機を考へて仇打せんと試むるものが多くある樣でありますゝ、何と淺ましきことでありませぬ歟、他人が畜生と呼だとて呼だ爲に畜生に化しはせぬ筈、然るに覺へて居れよと仇打する時は、定めて人道の外に出るの所爲を實現するは必定であります、人道外に出て畜生の所爲を行ふものならば畜生と呼だのを喜ばねばならぬ

道理であるまい歟、喜ばぬならば人道の外に出て、畜生の所爲をするは大なる誤りであります、他人が呼だ畜生といふ聲が耳に入たれば、自ら既往を顧みて一層つゝしみ、今後は如是の呼聲を聞くべからずと搆へ、曾て呼だ他人をして過言を謝せしむるまでに至るが人の人たる道を履むものであります、殊に佛願を信じ佛名を稱ふる身は、攝取心光の親の懷ろ、明ても暮ても大悲の親と寢起して居るものと思はゞ、畜生と呼ばるゝ樣な所爲ありてはなりませぬ、たとひ餘所より誤り認めて申すものであるとも逆らふてはなりませぬ、人以上の御方卽ち如來樣に知られてあるを思へば、誤り認むる樣なものは何といふとも氣にはかゝりませぬ、しろしめすほどけいますときくときは、たゞあさましうにうれしほづかし如來に知られて居るから善事は樂みつゝ出來る惡事は恐れつゝ出來なひといふ仕合であります。

第二十三　自力の機功を募るな

苟くも眞宗門内に信徒と呼はれつゝ、自力の機功を募る心ありて宜しひと思ふものはありますまひ、承知して募りはせぬが、募らぬ積りで不知〳〵自功を募るものは多くある樣に考へます、實に三省すべきことであります、彼舟から陸に移るとき、岸に登り損ふて水中に落込む者がある、是等も水に落る積りはなくして、落るのに相違ありませぬ、落る積りなきのみならず落てならぬといふ心を持て居るは必定なり、然るに落るは何故歟と申すに、舟より陸に移らんとするとき舟端に片足を殘し陸に向ふて片足を浮べ飛越すは、誰れも同じき事であらふ、其舟端に殘した所の片足を蹈み張て力を入れ過た爲めに舟を後方へ押し却けて陸と舟との中間を隔てることになり

て、登らんとする岸には達せず、落てならぬと心配する水中に落込むのであります、我をすくひたまふ彌陀大悲の誓願を聞て、信ずる一念に私の力の入らぬのであることは、誰れも合點して居るのなれども信じた疑ひませぬ、たのまれたと片足を我方に殘して蹈み張るやへに、知らず識らず自力の機功を募る中間へ落込むことになるので御座います。

第二十四　船中にて船の構造を聞け

世には本願の由れを聞き盡し名號の由れを知り盡し而して後に信じて安堵し樣なこゝいふ呑氣なものも少くありませぬ、是等の人は宗教の必要を感ぜざるは勿論自身の分限を忘れて居るに相違なひいかばかり學問して智慧を磨きても本願名號の由れを聞き盡し知り盡すといふ事は我々凡夫の能ふ事ではなひもとより不可稱不可說不可思

議でありますから依て聞て知り盡せといはず聞て信ずよとあるので御座います信じて後は命あらん限り本願名號の由れを聞くのは覺にて有難し忘れて心配なし外國に向て航海し樣といふ人が船の造り初より聞き機關の總てを知り造船長の資格を備へ而して後に乘込んとて船外に立て講義を聞くに時間を費す迂愚は致すまひ三百石や五百石積の和船に乘せて數千里の海外へ渡すといふものありといはゞ乘て行く思ひは起るまひけれども一萬噸もある蒸氣船に乘せて渡すといふには案じ煩ひなく乘込むでありませふ機關の構造が腹に入らぬから船中に入ることは出來ぬといふものはあるまひ本願名號の由れが腹に入り終らねば信じ兼るといふは造船長に昇進してから船に乘ると申す類であるまひ歟四諦や十二因緣の法をもて眞實報土へ往生させるといはゞ目的違の勸めやへ信じ兼る筈なれども生死の苦海ほとり

なしひさしくしづめれわれらをば彌陀弘誓のふのみぞのせてかならずわたしけると和讃にのたまふ如く五刧永刧の御思惟御修行に御成就遊ばされし弘誓の船に乗れよ渡すとあるを信じ兼る道理はなひであるまひ歟機關の話は前岸に達する用には立たねども聞きたければ船中にて聞くが宜しひ、聞きながら前岸に近寄るのであります、聞て覺へたものも忘れたものも共に船は乗せて行くのである、本願名號の由れは信じた後に聞かれぬのではなひ、信後生涯聞かるゝのであるから、早く信じて安心するが宜しひ、信後一聲稱ふる閑まなく娑婆の違乞と成ても彼岸に到着するのが弘誓の船であるけれども、娑婆に御縁のある間は骨の折れぬ稱名念佛は相續するが宜しひ、相續しながら不思議の由れを聞けば、いよ〳〵恩德が知れて、稱名相續に都合のよひばかりではない、世の生計の都合もよくなるのであります、固より不思議の由れなれば聞ても〳〵盡きものでは御座いません、機關の譯は聞て後覺へた者も忘れた者も乗た船の進行に影響なひが如く、本願名號の由れは聞ても忘れ聞ても盡ぬ事なれど涅槃の岸に近付くことは間違なひのなれば有難ひでありませぬ歟。

第二十五　難修難行

聖道門は總て難修難行なる故に、正信念佛偈には顯示難行陸路苦と述べたまひ念佛正信偈には難行嶮路特悲憐とのたまふてあります、いかにも讀誦といひ、持戒といひ、坐禪といひ、今日の世に易修易行のものでなひ、世に物好きの人ありと參禪など〻吹聽するも、俗に所謂三日坊主決して繼續して居なひ樣で御座います、偶ま持戒持律の正しき故雲照律師の如きは、市に虎の出たる觀ありて珍重致したでありまぬ歟、然るに第一の雲照は隱れて第二の雲照は未だ顯は

れぬ樣である、難行難修を證明する近き一例と申して宜しからふ定水を凝すと雖も識浪頻りに起り心月を觀すと雖も妄雲尙蔽ふ、見に付聞に付起り易く動き易きは煩惱妄念なれば、捨家棄欲出家發心せんとの素意は甚だ見事なれども、位官をすて妻子に離れた後念殘りがなひでせふ歟、たとひ位官妻子に心は殘らずとも「崛を出て又障子あり夏の月」昇階を望み大寺を好む是が卽ち崛を出た後の障子であります、形は解脫幢相の法服を纏ふ出家と成ても心は生存競爭の衢に血眼もて狂奔する所の在家より煩悶苦痛を感ずる事が多ひのであるから、到底眞如の月を見ること叶はぬのみならず、生涯迷いの闇に果たさねばならぬのであります、我宗祖大師は二十年間難修難行の域に始終を高察したまひ難行の小路迷ひ易きひよりて本願一實の大道に趣かんと移轉遊ばしたが吉水の門であります、明治の今日

我等日本の國民たるものは旭輝く國旗の下に駿々乎として進路を取り、國運の發展を扶けつゝ生涯世に務めねばならぬのであります、若し捨家棄欲ならねば未來悟道に達すること出來ぬといはゞ何と致しませふ、出家發心ならねば未來迷路を遁るゝこと能はぬといはゞ何と致しませふ、實に進退維谷ると申さねばなりませぬ、爰に七百年前望遠鏡を掛て今日を熟覽遊ばした我宗祖大師は在家示同の御行狀蓄妻噉肉の御振舞男女貴賤こくぐく、彌陀の名號稱するに行住座臥もにらばれず、時處諸緣もさはりなし彌陀の報土をねがふひと外儀のすがたはことなりと、本願名號信受して寤寐にわするゝことなかれ極惡深重の衆生は他の方便さらになし、ひとへに彌陀を稱してぞ淨土にむまるとのべたまふ、何の造作も入らず、何の工夫も入らぬ、鋤持つものは鋤持ちながら算盤彈く身は算盤彈きつゝ、獵師

も漁夫も擇びなく救ひたまふ彌陀誓願の不思議を信じて命あらん限りは親子も夫婦も其身〳〵の職分を勵み、國恩に報ふて世緣盡るとき淨土へ轉生するのであると御案内下されましたのである、何と有難きことでありませぬ歟、易行易修と聞ながら、修行せぬは所善はなひのです、遠慮の入らぬ眞宗念佛の行者なれば稱へつゝ働きませふ。

第二十六　百發百中より其體の定まるを賞す

村田少將は鐵砲の名人にして、五厘銅貨を虛空に投げ之を打つに外れることのなひといふ位である、打つ事の名人なるのみではなひ、銃を造るに工みなる人にて村田銃といはゞ海外に知らぬものなき程でありまし、門下にも道に達したもの多くして、雲中の塵とみる小鳥を打外さゞるものありと聞きますが、是等の人々が受たる免狀をみれば百發百中敢て賞するに足らず、其體の定まるを認むとありまし、成程射擊に功を擧たるとて活用せざる時は眞の功とはいはれませぬ、活用は變に隨て應ずるにあるのである、變に隨て應ずることは其體定らぬもの〳〵出來ることではない、依之百發百中敢て賞するに足らぬ其體の定まるを認むと記し與ふ、免狀は能く道理を究めたものでありまし、今眞宗念佛の行者として御法席に向ふた時は、いつも百發百中信心の沙汰しても報謝の談話しても外れたことのなひ見事なる人でも家運の不幸に遇ひ、又は身體の病氣に罹り、不如意の重なる時になると一心一向も他力金剛も消滅して、祈禱よ御籤よと、騷ぎ出すのがある、是等は信心の體の定らぬ證據でありて賞する事の出來ぬのみならず擯斥すべき念佛行者でありまし、和讃に金剛堅固の信心のさだまるときをまちにてぞ彌陀の心光照護して、な

がく生死をへだてけると仰せられてあります、攝取光中の身にて現世祈禱に心を寄せるなどあるべき筈は御座いません。

第二十七　影によりて本體を察せよ

障子を隔てゝ丸髷の頭や、廂髪の頭が映りたら女であるといふことを察するに苦まぬ筈であります、毬栗頭や坊主頭が映りたら男であると察して間違はなひでせふ、世に南無阿彌陀佛をとなふれば、梵王帝釋歸敬す、諸天善神ことゞくよるひるつねにまもるなり、と聞ても願力不思議の信心は大菩提心なりければ、天地にみてる惡鬼神みなことゞくおそるなりと聞ても、いかなる御方が諸天善神やら、いかものが惡魔鬼神やら、其體をみた事がなひ故、喜びも恐れも生ぜぬといふ人があるけれども、體を見認難ひのでも影を見ることは出來る筈なり君よ其樣に馬鹿律義するに及はぬでなひ歟、命が縮まるぞ遊んで來樣ちやなひ歟と、主人の金錢を握らせて散財に導かんとする者が有たら惡魔鬼神の影が映りたものと知るが宜しひ遠慮なく諫言し、覆藏なく忠告して呉れる人が有たら、諸天善神の影が映りたものと知るが宜しひです、總て影は其體によりてみるもの、古來直木の下に曲影なしと申してあります、其を耳に逆ふことて諫言を容れざる故、いつも善神を遠ざけ毒を含むと知りつゝ、其言に順ふ故、惡鬼に親む樣になり易ひのである、太た遺憾千萬であるまひ歟。

第二十八　聲によりて心を知る

眼色をみて其人の心の善惡を知ることや、耳形によりて其人の智愚を知ることや、手筋をみて其人の吉凶を判ずるといふの類古來多々ありますが、聲によりて其人の心を知る事も出來るのである、聲と

いふは只わ丶といふ音聲をいふのではなひ、語聲を申すのである、勤儉貯蓄の話をする中に立て貯蓄などするものでなひ、金錢はなひのが氣樂であるといふ人なら怠惰にして勤勉する心なきものと定めて誤りはながらふ、慈善事業や救助方案に反對とかり、又反對せずとも裏面に回りて其事の破綻に及ぶを企圖するものれば、人情のなひ惡鬼夜叉仲間と思ふて宜し、大師聖人若し流刑に處せられたまはずんば、我亦配所に趣かんや、若しわれ配所に趣かずんば何により てか邊鄙の群類を化せん、是猶師教の恩致なりと仰られたる御聲により て、慈悲深き宗祖の御心が分明に知らるゝでありません歟、五年間のみで歸落したまひたとすれば、瘦我慢仰せられたのでなひ歟といふ不審も起れど勅免を蒙りたまふ當時急いで歸りたまふ事なく彼所に化を施さんが爲に猶且らく在國したまひけりと、實際が明了

にあらはれて居ますから貧乏人が金は無ひのが氣樂ですといふ、類似ではありませぬ「二羽は立ち一羽は殘る閑子鳥」と恨みを吐た俊寛の樣で有たならば勅免と聞くや飛ぶが如くに歸洛したまひて、青天白日の身と成たぞと、世間に吹聽なさゝであらふに、化を施さんが爲に猶しばらくと有た年月が一年や二年ではなひ、二十餘年の長日月、迚も瘦我慢や義理立に出來る仕事ではありませぬ、御姿こそ黑衣黑袈裟の親鸞樣なれ御本地は敬禮大慈阿彌陀佛と尊拜を受けたまふ所の肉身如來の我宗祖見眞大師であるもの、最も然るべき事と尊仰が出來ます、聲によりて心を知ることを申掛てはからず、語路が走り過ぎました立返りて一言述べませふ、我々は不足のなひ眞宗門下に御育て受けながら、法席に列なる時さへ世間話に聲高く、喧々囂々たる樣では、佛祖の大恩を蒙りた信者とは思はれぬことであ

るゴーンといふ聲によりて鐘のあるを知り、ドーンといふ聲によりて太鼓のあるを知るで御坐いませう、南無阿彌陀佛〳〵と稱ふる聲によりて信心のあるを知るのである、撞木の當るのに鳴らぬといふ鐘はなひ筈、棒をもて叩くに音がせぬといふ太鼓はなひ筈、いかに懈怠の身でも御法緣の撞木を受けながらも南無阿彌陀佛〳〵の聲が出ぬ筈はなひ、南無阿彌陀佛の聲が出ぬのなら信心のなひ證據でありまひ歟。

第二十九　來客の好嫌を考察せよ

貴顯の客を饗應せんと思ふには、第一來客の好嫌を考察せねばなりませぬ、心配した饗應も來客の機に叶はぬ時は無功に屬すといはねばなりませぬ、碁將棊を好む客と知らば磐石等の準備を爲し、且對手たるべきものをも扣へ置くべきである、書畫骨董に心あるの客と

聞かば、床の間の軸物より香爐其他に注意を爲し、食物に於ても下戸に酒を强いたり、上戸に善哉を薦る如き、顚倒の取扱をせぬ樣致さねばなりませぬ、報恩講御取越を勤め御影向の御開山樣に對する心得勤める主人も參詣の一同も、御開山樣のいかなる事を御好き遊ばす歟、いかなる事を御嫌ひ遊ばす歟を知らずに勤めたのでは所詮がありませぬ、酒さへあれば何も他の物に望みなしといふ客に、盃の影をもみせぬ、始終茶菓のみをもて向はゞ、客は不愉快を感ずるでありませふ、たとひ主人の方には一斤拾圓の茶に、一折五圓の菓子を供へたのても客は半文錢の價値にもみませぬ、又奈良漬一切れ口に入れてさへ顏に紅葉を散らすといふ客に、一升一圓の日本酒一瓶二圓の舶來酒を出しても客を笑ませる事は出來ませぬ、御開山樣は花好きの御方なら松の造花に御滿足あらん、美くしき燭光が御好

きなら朱蠟燭に御喜びもあらん、然れども御開山様の御好物は花や蠟燭ではなさそうである、深く信じて稱ふるがめでたきことにて候といふ御言を頂けば、花より蠟燭より薫香より打敷より何より角より御好物は罪ありながら、障ありながら助けたまふ佛願にたすけたまへと遠慮なくすがりたてまつり、稱名念佛しつゝ往生を待つ人の出來る事にあるは必定で御座います、何と心易き事でありませぬ歟名聞我慢の品を揃へ之をみよといはぬばかりに飾り立た心の内は、煩惱の外ありませぬ、骨折で御開山様の御心に叶はぬことするよりも有のまゝにて出來る御報謝信じて稱ふるが目出度事にて候。

第三十

病院は病人の爲め

此様なる機にては淨土へは參れまひ、困りた事なりといふ人が少なくなひ、是等の人は阿彌陀如來が淨土を建立遊ばされた趣意を知らぬのでありませふ、病院の門外に立て、此様なる病にては病院へは入れて貰はれまひと心配する病人がありませふ歟、病院は病人の爲に建られたものといふ事を知て居るものなら、其様なる心配はせぬ筈、彌陀の淨土は何の爲に建立遊ばされたものであらふ、一一願言爲衆生故みなこれ我々一人〳〵の爲の御本願なりとの御釈がある、されば無三惡趣の淨土は我々の參るべき淨土なり、不更惡趣の淨土も我々の參るべき淨土なれば此機ではといふ案じ煩ひは入らぬのであります、病人が入るに遠慮するに及ばぬ病院なれども醫師のいふことを聞かされは病院に入ても寸功なしでありませふ、依て醫師の差圖に順ひ呑むべき藥を呑み、避けべき品を避け、醫のいふ如くにならねばなりませぬ、一生造惡具諸不善の我等の爲に建立したまふ彌陀の淨土へ參る事に遠慮は入らぬけれども、捨よとある雜行雜修

をすてず、歸せよとある正行に歸せずに居ては靈無之身無極之體の健康はにられませぬ、病ひの重きを知れば呑みにくき藥をも呑みませふ罪業深重と知らば呑みやすき所の妙藥六字丸一粒位を彼是申してはなりませぬ。

第三十一　凡心難測佛心

近來の學者に釋迦は豪傑である、されど未だ其說の全分を學んでみなひから、両手を下ろし首肯する能はずと云ものあり、釋迦一代の說法を學び盡すといふ事が我々凡夫に出來能ふ事でせふ歟、解し得ざる所ある内は、信仰せずといふ水門を閉て居ては生涯法水の潤を受ることは叶はぬのである、分限を忘れてはなりませぬ、蟻や蜉蝣の小蟲にして人間の居動を測ることが出來ませふ歟、凡心をもて佛心を測るは小蟲の人間を測らんとするよりも懸隔甚しひのであるから、不思議と信しづる上は、とかくのはからひあるべからずの指導に順ひませふ、蟻や蜉蝣に人間の事を知らせるには、彼れの類に入て聞かせるに如かず、盡十方無碍光如來の事を知らせんとて我々人類に入て說き聞かせて下さつたが釋迦佛陀である、學士に成ても博士に成ても凡夫は凡夫㋐へ凡夫だけの區域に在て高下淺深の差あるのみ、乞丐の類が河原に石枕しながら、僕等が知事になるならば、戸毎に物を乞て與へさる家なしといふ寬大の處置を取るべしと申したといふ話がある、知事に成たら戸毎に物を乞ふ事はなひのなれども已が分限より出ることの出來ぬが乞丐の心である。

第三十二　佛法の眼鏡を用ひよ

望遠鏡は三里五里の遠方を眼前にみせる器械なれども、翻回して之をみるときは、眼前の近きが三里五里隔てた樣に遠くみ㋐るのです

細小の文字も粗大にみせるは眼鏡の力である、白き物を青く又は赤くみせるも眼鏡にあり、總て眼鏡によりて相違を生じます、古歌に『世の中の人をあしゝと思ふなよ我さへよくば人もよからん』と讀んであるも直く正き心をもて世に立てよといふ勸誡でありませふ、所謂眼鏡の掛樣宜きによれは、細小の讀み難き文字が粗大の文字と成て讀み易くなる、煩惱の眼鏡を掛て世間をみるときは、三毒五欲を增長するのみ甚だ厭ふべきものなれども、佛法の眼鏡を掛て世間をみるときは『咲きつゞく花見るたびに猶も亦いと願はしき西の彼岸』と蓮如上人の讀みたまふが如く、總ての事みな有難く貴くなりて愈よ淨土行の道中である事が感ぜらるゝのであります、妻子も朋友も共に是淨土行の道連れ釋迦彌陀といふ両親を持つ兄弟と思へば肉體の上にこそ種々の替り目あれ、廻向にあふた信心の上よりみるときは甲乙のなひ正定聚不退の菩薩同士である、溪聲盡是廣長舌山色豈非清淨身と吟じた東坡居士ばかりに耳目の樂みを占領させては置けぬ、信者のありだけ此愉快を持たるゝのである。

第三十三　信心の十德指輪の三德

古昔西洋の某帝が、世界第一といふ指輪を所持して居れた、何をもて有名なるやと申せば、三德を具する指輪で有た其三德とは一に人望、二に道德、三に知識なり、之を具ふが故に世界一と名が高く成た、帝に三子あり、何れも學力才能兼備して伯仲を分別し難ひ兄弟三人でありた、帝が病床に就かせられ帝位を襲くの證品たる指輪を三子に讓り度親心である乃て某技師に此指輪と同樣なる品を二個造れと命ぜられました、技師は形は同樣に造らるゝと雖も德を添る事は不可能なりと申上た、數日の後出來上りし二個を原品と並べみる

に判別し難ひ位である、之を有せられた帝は、いよ〳〵臨終近き時一個宛三子に與へたまひた、各々自身こそ帝位を襲くものと喜んで居られた、然に帝の崩御後三子の内の一太子は何事をもいはず父帝の喪を愼みつゝいらせられたが、他の二子は相互に自らが帝位を襲くべき印ありとて、指輪を證據に持出しての爭ひ到頭論決し難く裁判を開くことになりました、判事の申す樣貴方々は先帝より指輪を御授かりに成りしとて證據持出し爭はれますが先帝の指輪には人望道德知識の三德を具ふる筈、貴方々の御所持の指輪が若し眞物ならば斯樣の爭ひを發したまふ道理なし、御兩人の御所持品は何れも僞物に相違なし、依て帝位を襲きたまふ事は出來ませぬと判決した而して獨り愼んで爭ひの仲間入なさらなかつた一太子に帝位は定まつたといふ話がある三德を有した指輪を所持してさへ爭ひの仲間入はしませぬ、獨り愼んで居られた處眞實の指輪三德あるをもて帝位に登られました、今我等が受けたてまつりた他力廻向の信心には、三德や五德ではなひ、信卷を拜讀すれば金剛の眞心を獲得すれば橫に五趣八難の道を超へ現生に十種の益を得、何ものをか十と爲す、一には冥衆護持の益、二には至德具足の益、三には轉惡成善の益、四には諸佛護念の益、五には諸佛稱讃の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八にい知恩報德の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益なりと仰せられてあります、斯くの如く德を有する信心を決定したる身が火花散して是非を爭ひ自讃毀他の專賣特許の樣にして居るのでは十德を有する指輪否信心とは思はれませぬでなひ歟、たとひ汝の領解は間違ちやと罵るとも金剛の眞心は崩れぬ筈、敢て議論を鬪はせるに及ばぬのである、負けてはならぬ勝た

ねばならぬの法義者なら前の二太子の類にしし眞の善知識の御裁判を仰ひたなら共に敗を取るべきこと必定である、獨窮に御恩師德を仰き稱名念佛して居れは求めさる帝位を得たる太子の如く、報土往生に間違ひはなひのである、彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の主になるなり、南無阿彌陀佛の主になるとは信心をうることなりとは、蓮如上人の仰せでありますし、汝の領解は間違ひはなひから請合といふ人は何百人ありても、口先が聞いて心底の見ぬ凡夫同士、一もあてにはなりませぬ、唯あてになるのは末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪はいかはご深くとも我を一心にたのまん衆生をば、必ず救ふべしとのたまふ阿彌陀佛の勅命のみでありますし、阿彌陀佛の勅命に信順したのが二心なき領解である、智目行足缺けた凡夫の證人は一人なりとも心配は入らぬ、諸佛護念諸佛稱讃心光常護と本師の彌陀も、十方の諸佛も、離れたまはぬとある身の上、之を喜ばずに居られませふ歟、心多歡喜知恩報德常行大悲と何れの方面に回りてみても、不足云ふべき餘地のなひ一念發起人正定聚、たゝ何とした御慈悲やら、何とした仕合者やらと仰ひて喜び伏して喜び南無阿彌陀佛〳〵と稱名念佛するより外はなひのです、願力不思議の信心は大菩提心なりけれは、天地にみてる惡鬼神みなこと〴〵くおそるなり冥衆護持や轉惡成善の益を有する信心であるもの、聞て分つた慢へて語らるゝ位を因種に擬する他力外の人達に妨碍を受る筈がなひ、誹らば誹れ罵らば罵れ、我不關焉と超然位置を高く持たるゝのであります、斯く成らるゝ所以は自らの力ではありませぬ、至德具足の益ありて不足なき他力廻向の御蔭である。

第三十四　罪の深きを知れば恩の大なるを知る

助くる救ふといふの一言には差別なけれども、助けられ手救はれ手の手許によりて恩を知るには淺深の差別かなひてはなひ、千圓の爲に一命を棄る者を救ふには千圓を以て向はるゝけれども、萬圓の爲に棄る命を救はんとするには千圓を以て聲を掛る事は出來ぬ、是非共萬圓の準備せねばならぬ、助け度救ひ度の慈悲は平等なれども、之を施行する對手異るに應じて心配の淺深差別が出來る、心配の淺深ありても平等の慈悲を持つ施行者は、金の多寡に彼是の差別は思ばざるにせよ、助けられ手救はれ手は金の多寡によりて恩を感ずること差別なくてはなりますまひ、今も末代の凡夫惡業の我等たらんもの、罪はいかほどふかくとも、我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしと、佛勅を蒙りても大恩を感ぜざるのは百圓欺二百圓の爲に棄る命を救はれた位の思ひて居るのではあるまひ欺、我等の罪業

深重は千圓や萬圓の比ではなひ、宗祖大師は無始已來乃至今日今時まで穢惡汚染にして清淨の心なし、虛假諂僞にして眞實の心なしと仰せられてありて、永不成佛必墮無間の大借金を負ふて居るのである、之を救助したまはんとの慈悲の御手許一朝一夕の御用意には調ひませぬ、宗祖大師は次の御言に、是を以て如來因中に菩薩の行を行したまひし時、三業の所修一念一刹那も淸淨眞實の心に非ずといふこと有ることなし、如來淸淨の眞心を以て、諸有の衆生に廻向したまふと仰せられてあり、罪が重ひから救ひたまふ御手許の御苦勞も尋常では行かぬ、大無量壽經に欲覺瞋覺害覺を生せず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸法に著せず、恐力成就して衆苦を計らず少欲知足にして染恚痴なし、等等と說きたまひてありて、我等の爲に不足なく願行成就まし〳〵助くるそよの御聲を下したまひたのであ

れば、生るべからざるものを生れさせたまふ、超世の悲願なればこそ、大恩を知らねばならぬ、大恩に感ずれば報謝の大行務め易くなられますのである。

第三十五　功德の〆高南無阿彌陀佛

一萬圓受取た内貨幣紙幣の種類を分かてば、十圓金貨百個あり、百圓紙幣五十枚あり、十圓紙幣二百枚あり、一圓紙幣千枚あり、五十錢銀貨千個あり、二十錢銀貨千五百個あり、十錢銀貨二千個あり煩はしひ事なれども、一萬圓あるここさへ忘れされば、更に憂を抱く事はなひ筈、數を算ふる時は金貨が千圓ある、百圓紙幣が五千圓ある、十圓紙幣が二千圓ある、一圓紙幣が千圓ある、五十錢銀貨が五百圓ある、二十錢銀貨が三百圓ある、十錢銀貨が二百圓ある、合金一萬圓相違なくありと疑ふ所一點も無かつたが、後に考へてみれば

十錢銀貨が幾千で有た歟、五十錢銀貨が幾千なりし歟を忘れた故、一萬圓は怪まるゝといふものはあるまひ、〆高を忘れずに居れば足るのである、今も不生欲覺瞋覺害覺不起欲想瞋想害想乃至功德成就と並べてみるときは、甚だ多數であるから、聞く傍より忘れて仕舞ますけれども、萬善萬行恒沙無量の功高の〆高が南無阿彌陀佛なりと聽聞したら、之を忘れることは申されますまひ、たとひ忘れても受取た一萬圓は減りはせぬ、煩惱妄念に狂はされて行者の方には忘れても、能令速滿足功德大寶海御與へに成た南無阿彌陀佛は減りはしませぬ、何と有難きことでありませぬ歟、一萬圓は公債にして保管申込て置ても催促せずに五百圓の利子は元に組入れて貰はれます、他力廻向の信心卽ち南無阿彌陀佛は攝取心光の保管によりて三毒五欲の盜難火難を怖るゝ憂もなく、年に五百圓の利子ではなひ、日々

に無量の利益を得るのであります、さあ〳〵高忘れぬ樣に樂みませせふ、南無阿彌陀佛〳〵是が五刼永刼働て集めたまひた不可稱不可說不可思議といふ數限りなき功德寶財の〳〵高にして、我々が信の一念の時頂戴したのである、蓮如上人は彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の主になるなり南無阿彌陀佛の主になるとは信心をうることなり、と仰せられてあります。

第三十六　稱へてみれは易し

かくの如く決定しての上には、ねてもさめても命のあらんかぎりは稱名念佛すべきものなりとは、明暮見聞のかさなる御教訓にして、誰れ一人知らねとは申しにくからふ、知て居ても御教訓の如く御用ひいたさねば論語よみの論語知らずの類であります、世には喰はず嫌ひといふが有て稱へにかゝらぬ先から、稱へられまひと思ひ定め

進む勇氣のなひのみならず、一歩も出さず寐込て仕舞ふといふ風情が多ひ、古來案じるより產むは安しといひ傳へてあれば、速に信じて稱へにかゝりませふ、始めての懷妊次第〳〵に身は重くなり、下腹は山の如く我膝かみにぬ樣に大きくなり、自ら思へば虛弱の身體さなくてさへ、產は生死の境ときく定めて苦痛を感ずる事であらふと、種々の杞憂より終に神經に少しく狂ひを生じ、難產に苦むよりは寧ろ井に身を投じませふと、うろ〳〵して居る所を親達に見咎められ、死を決したのなら今暫く待て產に臨んだ時死ぬがよひと、徐々諭しを受けて心も靜まりしが、案外輕く分娩して自他共深く喜んだといふ事がある、命あらん限りねてもさめても其樣な長ひ間稱へられ樣歟とは、案じ過した次第なり、兎も角今日一日稱へませふてなひ歟「今日といふ日が大事の日なり昨日過ぎたり明日知れず」

然れば長ひ間ではなひ、晝夜にて二十四時間其内に於て、夜は睡眠時間に除けねばならぬ、晝も家業家職の爲に手足ばかりでなく、口を使はねばならぬ事少なくなからふ、而してみれば僅かの間稱ふるのである、此樣な理屈や算用は後と回はしにして、只南無阿彌陀佛〳〵と稱へませふ、稱へながら手仕事も出來稱へながら足も歩行は出來るのである、稱へた昨日は消滅したれども南無阿彌陀佛は消滅しませぬ、乃て又今日一日御恩報謝を務めませふと潔きよく寐所の内から稱へつゝ起きませふ、其が朝な夕な佛と共に起るのでありまず、日が暮たら稱へつゝ寐所へ入て臥しませふ、其が夕な〳〵佛と共に臥するのであります有難ひねー

第三十七　稱ふれば愉快である

ねてもさめてもへたでなく、南無阿彌陀佛をとなふべし、との仰せを聞き迚も叶はぬと尻込みするものがあるが、丁度昇り一里の阪路と聞て麓に腰を折た樣なものである、其樣に心配したものではありませぬ、蓮如上人は信心の人をみてあの如くならではと思へばやがてならるゝなり、と仰せられてあります、先に越行く人があるもの彼も人なり我も人なり、越されぬ筈はなひと奮發して昇れば必ず頂上へ達せらるゝのである、頂上に達し得て四方を一瞥の下に收めた時の愉快は何とも比況すべきものかなひ、生るべからざるものを生れさせたまふ大慈大悲の御恩に對して、麓に腰折る樣な仲間入してはなりませぬ、先に喜ぶ人も後に信じた我も受た御恩に差別はなひのである、あの如くならではと舊發して、御恩報謝の稱名相續いたしませふ、一日〳〵進歩してみると自ら佳境に達する事が出來ます梅や櫻をみるに付、桃や李をみるに付、極樂の七寶樹林が聯想され

鳥の囀るに付、月の出るに付、雪にも雲にも悉く御恩を仰ぐ緣が起り稱へて居らなかつた、已前の事が恥か敷なります、嶺上に四方の風景を一瞥するとき麓に居たなら此清快を知る事は出來ぬのに奮發してよかつたなゝと思はるゝ如く、迚も叶はぬと思ふた懈怠心に任せて居たら、今日の有難さ尊とさは知られぬので有たやと、益々他力の御催促を仰き尊とまれる事でありませふ、山の頂上に達してみた四方の風景は望遠鏡によりてみても、三里か五里といふ限りがあるが稱名相續の佳境に入ると限りなき風景を樂むことが出來ます已に次如彌勒といふ立脚地もへ前に滅度後には正定聚聲聞緣覺を溪に見下ろし、憶念の心つねにして五言七言の詩ではなひ三十一文字の歌でなひ、十七字の俳句でもなひ、六字の御名を高く唱ふるのであります。

第三十八　佛恩報謝の務め

報土往生の正因は信心に究竟なれば稱名念佛無用なるべし、と思ふものがある、往生の正因は信心に限るもの敢て稱名念佛に用事なしであるが、稱名念佛は佛恩報謝の務めである事を忘れてはならぬ、惡口をいひ惡作をする所の腕白兒童も學校の課業を務むる時は惡口も惡戯も出來よすまひ、自ら身を守る事に成て居ます、我々も順境に逆境に種々緣に觸れ樣々の事により煩惱の騷ぎ出す凡夫故念佛の課業を務めさせて下さるのである、いかなるものでも念佛と惡口と並べて同時に俱發することは出來ませぬから、自然と王法をも守る事になります、先德の御言に信心決定の行者ははからざるに五常もおのづからそなはり候べし、其もへは眞實信心のこゝろあるは物をあはれむ心もあり、物をあはれむ心なくば信心具足の人とはいふべ

からず、信心をそなふる人は無理非道をかまへず、正直正路にして禮義を少しも紊すべからずと仰せられて信心決定の人が無理非道を構へざるのは信じて稱ふる故である、たとひ信じたと申しても稱へなひ人は香を持せぬ造花の如く、眞實信心ではなひのです、我々の爲にならぬ御教化はありませぬ、我々の德にならぬ御指導はありませぬから、報謝の稱名念佛を務めませふ。

第三十九　第十八願は正札附の定店

斯樣な機では助かるまひ斯樣な姿では參れまひと、本願に寄り附かぬのは、阿彌陀如來を露店の主人と心得て居るのであるまひ歟、露店といふものは不實商ひが多ひから掛直を致しますよりて直切れば負けもする故、代品物に委しひ人ははまりもしますまひけれども、素人では油斷するとはめられるは必定である、第十八願は露店商の樣な不實でなひ掛直もなければ負けもせぬ、負けて貰はすともはまりのなひ眞實至誠の代品物である、智惠の眼の閉塞した凡夫に施與したまふのであれば、御辭儀せずに拜受しませふ、三越や高島屋は定店にて不實のなひに相違なくとも金錢なしに代品物を與へて呉れぬ、第十八願の御主人は我れ無量刧に於て大施主となり、普く諸々の貧苦を救はずんば誓ふて正覺を成らじと因位に御約定ありた如く善根功德と引替に助けてやらふとあるのではなひ、無善造惡の凡夫の爲に令諸衆生功德成就と施與して下さる大悲であるから、只何とした御慈悲やらと强き御慈悲に負けて自力の機功を投出しませふ、否投出さねばならぬのである、三越や高島屋の家族に成たらよからふと涎を流した婦人が有たと聞きました、何卒强き御慈悲に負けて下さひ、三越や高島屋の家族ではなひ、第十八願定店の主人とならし

れます。

第四十　女人成佛の願あり

大蛇をみるとも女人をみる勿れ、一回女人をみれば眼の功德を失ふと、龍樹大士はのたまへり、と聞かば今の世のバイカラ婦人は龍樹を對手に議論なさるゝ勢であらふが、威張り過で恥をかゝぬ樣なさるがよひ、議論し勝て得た所で、實際女人は男より罪の淺ひ方ではなひ、龍樹大士が一たび女人をみる時は眼の功德を失ふと有た爲めに、未來も男は成佛すれど女人は成佛出來ぬ事に定まるのなら、議論に勝ちて龍樹を押込め男同樣に未來成佛せんといふが道理ある事なれど、佛に女人成佛の願ありと知らば、議論を止めて速に佛願を信じ成佛なさるが宜しひでなひ歟、されば議論せずに勝ちが取れる仕合である、女人成佛の願と申すは第三十五の願である、卑きより

高きへ物を引上るに繩の强弱を吟味するは引上る物の輕重によります、第十八願に於て十方衆生と招喚したまふ聲の中に女人が洩て居るのではなひけれども、女人は男にまさりて罪深く業重き故に、女人自ら疑怪の念深ひゆへ其が爲に佛は、もとより第十八願に洩れたまはぬ御用意ありて招喚したまへるもの御手許に御案じ氣は更になけれども、女人の疑怪を除く爲殊に第三十五の願に女人成佛を誓ひたまひ、疑ひ深き女人をして安堵させしめたまふのであります、愈よ大恩を仰がねばなりませぬ、和讃に彌陀の大悲ふかければ佛智の不思議をあらはして、變成男子の願をたて女人成佛ちがひたり、と御述べになりてあります、何ど有難ひでありませぬ歟、世に議論好きの人ありて、十方衆生と第十八願に誓ひながら別に女人成佛の三十五願を開くは何の故なるぞ、十方衆生中女人の洩れてある筈がな

ひ若し洩れてあるとすれば男子成佛の願とはいふとも、十方衆生といふべからす、十方衆生は男女も善惡も擇はぬのが實ならば、三十五願は無用の誓であると口に泡を吹く所なれども、前に申した如く女人は男に勝りて罪深く隨て疑ひ多きゆへに、其れをして安慰せしめん爲の佛の大悲であると領得すれば、議論の泡は消滅します、蓮如上人は女人の身は、いかに眞實心になりたりといふとも疑ひの心は深くして又物なんとのいまはしく思ふ心はうせがたくおぼへ候、ここに在家の身は世路につけ又子孫なんとのことによそへても、只今生にのみふけりて、これほどにはや、目にみゐてあたなる人間界の老少不定のさかひとしりながら、只今三塗八難にしづまんことは露塵ほども心にかけずして、いたづらに明し暮すはこれ常の人の習ひなり、淺ましといふもおろかなり、かゝる我等如きの淺ましき女

人の爲におこしたまへる本願なれば、まことに佛智の不思議と信じて我身はわろきいたづらものなりと思ひつめて、深く如來に歸入する心をもつべし、この信ずる心も念ずる心も彌陀如來の御方便よりおこさしむるものなりと思ふべしと、鏡に懸てみるよりも明かに御教訓なされてあります「何事もみないひやめて仰ぐべし救ひたまへる高き御恩を」

第四十一　如來の御手許を見よ

明暮御法を聽聞しながら、いつも彌陀に歸命すといひながら此心得にて誤りなからふ歟、いかゝであらふ有難さが深くならぬ、此樣な事でよひのであらふ歟、今少し歡喜の增長する樣になりさうなものを喜びが足らぬ、信じた積りなれども信じたのでなひ歟などゝ自らが自らの心の內を穿鑿して顏の皺の伸びぬ人があるが、何と氣の毒

な次第であるまひ歟、其樣な穿鑿をして居る樣では百年經でも埒が明かぬ事である、是なら淨土へ參られる是なら悟を開かれると自ら究めるのが他力門の宗意ではあるまひ、金錢にせよ品物にせよ與へて吳れる人より受取た身が彼人が惠みしは間違ひなき事故正に受取て我手にあれども、喜びが薄ひ有難く思ふ心が足らぬ、此樣な事では貰ふたのが虛僞でなひ歟、受取たけれども取戻されはせぬ歟、安心出來ぬ困りたものであると苦痛致すでせふ歟、其樣な人はあるまひと思ふ喜びが出ぬ有難さが足らぬ、夫が善ひ事とは申さねども、喜へ助くるの本願はなしと聞けば、愈よかゝるものを洩したまはぬ約束は、一念業成と未だ一聲の念佛も口に出ぬ前に濟んたとは、何といふ仕合者そと如來の御手許を仰ひて、御恩を報じますのが肝要であります。

第四十二　務めといふは氣任せにならぬ事

本願を疑はぬのが信心なりと聽聞して、疑ひなきまでには至りたけれども、未だ御恩報謝の稱名念佛が意の如く口に浮ぶことにならぬ稱へ樣に勵めば自力となるの怖れあり自らあらはるゝまでには至らず、何とした宜しからんと、苦にして居る人も少なくなひ樣であるが、稱へられぬので往生を案じるのなら、信じたといふは虛僞故御恩報謝の稱名出來ぬは當然の事である、又稱へられぬ爲に往生を危ぶむ心は、更に起らねども、おのづから出で來へくと思ふて待つのなら、今より待たずに稱へませふと心掛るが宜しひ、其は決して自力念佛になる氣遣ひはありませぬ、固より信の一念に往生の業事成辨じ行先に案じ氣のなひ身の上、受た大恩に對し報謝を勵むのなれば、遠慮なく鞭打つ思ひで稱へなされ、先德の御言に信は大悲の

佛智にすがり報謝は行者のあつき思ひを勵むべきものなり、と仰せられてあります、稱へ樣と思はずに獨手に口に出て來るが至當ならば敢て懈怠するなといふ、教訓は入らぬ筈である、稱へねばならぬのを懈怠する故に懈怠を戒め、又は務むべしとも勵むべしとも御奬勵があるのです、藝妓なその事を務めの身といふは、三昧線をひき歌を謠ふからではなひ、若し其れなりといはゞ貴顯紳士の嬢さま方も、務めの身といはねばならぬ、同じく絃歌を弄ひて一は務めの身と呼び、他は務めの身といはざるは氣任せにすると否とによるのであらふと思はれます、嬢さま方のは他人が希望しても自分の機に好まぬ時には絃歌せず、客來がある故入釜敷と父母から止められても爪ひき位は宜しからふと止めなひといふ我氣任せ我まゝである、藝妓は其樣な我まゝ氣まゝは出來ませぬ、リウマチスの爲に手が痛み

感冒の爲に咽喉が痛み絃歌共に望まねども、客の所望を拒否する事は出來ませぬ、痛苦を忍んで喜笑を顏に洩しつゝ客の命に應ぜねばならぬ、依て務めの身と申すのであるまひ歟、されば稱名念佛を佛恩報謝の務めなりと聽聞してみれば、口より出たらよし出なければ是非なひといふ樣な、我まゝ氣任せにして置てはならぬ、宗祖大師や蓮如さまから、ねてもさめても命のあらん限りは稱名念佛すべしと、所望を受たの故務めねばなりませぬ、たとひ御所望や御催促はなくとも生るべからざるものを生れさせたまふ、廣大深重の佛恩を荷ひながら、報謝せずに居てはなりますまひ、絃歌に務めた藝妓の花代は幾干か知りませぬが高の知れたものてあらぶ、御恩報謝に務めた利益は不可稱不可說不可思議で御座います。

第四十三　御報謝は煩惱の麥飯ならぬ歟

佛祖の大恩を忘れますること、御報謝にする事が悉く煩悩の肥料に成て仕舞ますから、注意せねばなりませぬ、從前監獄處の囚徒の食物は至極上等品にて有た樣子、其が今日麥飯と成たのは、種々他に原因もあらふけれども、囚徒の心得より美食を粗食に變更する事に成た樣である、其は何となれば囚徒等が恩遇に泥み、出獄した後も冬氣になれば寒氣を忍で働く代り監獄に入て、御賄受け樣といふ横着者が陸續出來たる故、終に今日の有樣に變更したと申す事ちや、監獄内の食物に麥の雜るは囚徒の心得よりすと云事は囚徒とならぬ身に關係はありませぬが、今關係あるのは信者と名の附た御同行の中に御報謝〳〵と勤むる内に、雜修の麥が入りませぬ歟といふ事である新調の打敷を掛ては、隣家と競べ劣りはせぬぞと、鼻を高くし花や蠟燭も餘所に優るゝと慢心は起し雜る位でなしに全然麥ばかりの樣に煩悩のみが御報謝に座を占て居ませぬ歟、三省すべきことで御座います、御指導下さる宗祖大師や、善知識は麥飯の報謝を御勸めはありませぬ、海山ならぬ大恩に向ふて、ねてもさめても稱名念佛せよとの御教示であります、雜りものなしに佛恩報謝の大行を務めませふ。

第四十四　御花蠟燭も御報謝の肥料

御恩報謝は稱名念佛に限ると聞てから、御花も蠟燭もやめたといふ人がある、然れば佛檀も入らぬ樣に思はるゝいかゞでせふと尋ねに來た者があります、是等の類は近來少なくなひ樣です、和讃に助正ならべて修するをばすなはち雜修となづけたり、一心をねざるひとなれば佛恩報するこゝろなし、と仰せられたるを心得誤りたのでありませふ、助業とは讀誦觀察禮拜讃供の四にして、正業とは稱名の

一行であるから並ぶれば雜修になる、稱名のみが專修であると早合點して手前定木を造りたに相違なひ、彼助正ならべて雜修になるといふは、御報謝に稱名念佛するものが御花蠟燭の供養してならぬとの仰せではなひ、正業たる稱名と助業たる前三後一と同視し、共に淨土の業因と思ふて務むる心を御誡めなされたのである、正定業たる稱名念佛をもて、往生淨土の正因とはからひつのるすら、猶もて凡夫自力の企てなれば、報土往生叶ふべからず、と改邪鈔に御教誡あるのですもの、前三後一の助業を正業に並べて同視するを御誡めなさるゝ筈であります、助業としての讀觀禮供は廢せずとも宜しひのです、廢せず存ずるので懈怠の身に稱名念佛の相續が出來るのでありますし、椽側を箒もて掃除したるとて忘れた稱名念佛を申すことなくも、御佛壇の掃除せんと羽箒や布巾を手にするときは、必ず稱

名念佛するであらふ、而してみれば御供養の花蠟燭も廢することは出來ませぬ、例ば稱名念佛を申す御報謝の肥料であります、野菜を畠に取るときは鼻歌した下婢も、御佛前に供ふる花を折るときは稱名いたす樣である、御花蠟燭を嫌ふ人は正業でなひから雜修になると早合點して廢するに相違なひが、正業でも稱へて往生を願ふのなら念佛は專修なれども、稱へ心か雜心かへ眞宗門内のものとはなられませぬ、助業の品を正業と同視せず、稱名念佛して御恩報謝を務むるに助緣とする讀觀禮供は決して廢するに及びませぬ、遠慮なく爲さるが宜しひけれども自慢してはなりませぬ、御恩報謝の本尊たる稱名念佛さへ稱へらるゝとて自慢は出來ぬのであれば、附隨の助業に自慢の出來る道理がなひ、往生の業事戒辨は信の一念にすみて已に攝取心光の御照護を蒙りて居るもの、何を務めたるとて、往生

の用に立んと思ふ筈はなひ、只是佛恩報謝の務めである、其要點が南無阿彌陀佛を稱ふるにありとは有難ひことであるまひ歟、何を御緣としてなりとも稱へませふ。

第四十五　勤儉貯蓄の仕上を惠まれた

金錢あれば萬事が意の如くなりまして、家屋も金錢によりて出來ます、衣食も金錢によりて出來ます、旅行も金錢によりて出來ます、山も金錢によりて手に入り、人も金錢によりて動くといふ樣に、何事も自由自在である、勤儉貯蓄を忘れずに實行し自由自在の身となるべしである、善根功德に優なれば萬事意の如くなりまして自由自在である、不殺生不偷盜不邪婬不妄語不飲酒の五戒を貯蓄すれば人間界を造り得られ、十善を貯蓄すれば天上界を手に入れらるゝ、苦集滅道の四諦を貯蓄すれば聲聞が我物となり、無明行識名色六入觸

受有生老死の十二因緣を持つときは緣覺となられ、布施持戒忍辱精進禪定智慧の六波羅密を貯蓄すれば菩薩となるといふ樣、因に應じたる果を得らるゝのである、然れども家屋や衣食を自由自在にする金錢とは違ふて、善根功德の寶財は勤儉貯蓄の方法によりて、その功を奏すること能はぬのみならず、勤儉貯蓄などゝいふ事は全然廢棄せねば聲聞緣覺菩薩といふ如き、人天以上に進級することは叶はぬのであります、然るに爰に我々の喜ぶべきは、他力淨土門の開けてある一事なり、たゞひ門は開けてありても入るべき資格がなかつたら入る事は叶ふまひ、資格はありても案内がなくんばまゝ〳〵せねばなるまひのに、祖師善知識の御案内あり、一念歸命の時正定聚といふ資格が具はり、諸佛諸菩薩の行守護に預り、まゝ〳〵したくとも出來なひ身になして頂くことは有難ひことであるまひ歟、斯樣な

自由自在は誰れの御蔭によりて得らるゝのであらふ、大慈大悲の御親より讓與せらるゝのである、大悲の御親は因位に於て三生六十劫や四生百劫の御苦勞ではなひ、兆載永劫(ノ)間功德善根の勤儉貯蓄を遊ばされたのである、其は智慧の目の盲ひた願行の足腰立たぬ我々を救はん爲でありましたのである、善導大師が一一願言爲衆生故とのたまひしも、宗祖大師が五劫の思案といふも、兆載永劫の修行といふも、ひとへに親鸞一人がためなりと仰せられたも此事でありまず、佛恩師恩を忘れてはなりませぬ、國寶の金貨紙幣を施して貧民を救ふてさへ樂しひものであるが、普賢大悲の德を施して苦界の衆生を救ふ還相廻向の將來は何とも比況すべきものはありますまひ、國寶の貯蓄にはカーチギーでも限りがある、他力廻向の南無阿彌陀佛は不可稱不可說不可思議こて限りなひのである。

第四十六　他力廻向とはあちらより

自力廻向はこちらより、他力廻向はあちらよりなれば、我等の勞する事は入らなひが、恩の廣大深重なるを忘れてはならぬ、自力廻向は此方の岸から彼岸に達せらるゝ迄、埋立て道を造り進み行く樣なものであるから、築造した道は波浪の爲に洗ひ去られ、三年五年の勞も一時の風波に無功となるの慘狀をみねばならぬ如く、積だ善根も累ねた功德も貪瞋煩惱の風波の爲に忽ちに消滅して慨歎いたさねばならぬのである、九頭龍川の改修でさへ土堤を築き塵埃を浚へるに、五年や七年に成就はせぬ、迷の此岸より悟の彼岸に進むべき道路を築造するのであるもの、三大阿僧祇といふ時間を費さねばならぬ道理であります、他力廻向のこの反對で彼岸より此岸へ道を築き我等をして通達せしめて下さるゝのである、道路は通してありても

嶮岨なれば越へ難し、又嶮岨ならずとも泥濘深きは進むに難かるべし、他力廻向本願一實の大道は其樣なる難行嶮路でなひから、易往大道廣開示と御讃嘆なされてあります『いさぎよくすゝみ申さん南無阿彌陀佛になるまで六字大道』此岸より彼岸に到達するの道は六字である、眞實不虛妄の釋迦如來が指導したまひた道である、敬禮大慈の宗祖大師が案内したまふ道である、疑ふ點は針の尖程もありますまひ、南無阿彌陀佛〳〵『門松や冥途の旅の一里塚』といふ古人の句がある、信心未定の人の眼に映した新年は斯く云はねばならぬであらふ、本願を信じて佛名を稱ふ、往生一定御助治定の身の上の眼には同じ門松をみても、冥途の一里塚と映しはせぬ『門松や淨土の旅の一里塚』と口占するであらふと思ふ、是も自らいふ口にもたぬ、他力廻向のあちらなり、有難ひでありませぬ歟、さあ〳〵廣

き道に眠りて居てはならぬ、南無阿彌陀佛〳〵と進行いたしませふ

第四十七　信行は雲と龍の如し

稱名念佛は佛恩報謝の要行なるにも拘はらず、之を相續するものが少なひは何故であらふと考ふるに、信心爲本の宗義を取誤り、佛恩の稱名を廢棄する類が增殖いたしたに相違なひです、往生の正因は信心にあへに稱名念佛を持出すに及ばぬけれども、佛恩報謝は稱名にあへにねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をとなふべしと御勸め下さるのである、往生要集中本（無餘修の下）に要決云專求極樂禮念彌陀但諸餘業不令雜起所依之業日別須修念佛讀經不留餘課耳導師云專稱彼佛名……不雜餘業とあり、次に寶積經を引て問答し、又迦才淨土論を引て云く、譬へば龍行けば雲卽ち之に隨ふ如し、心若し西に行けば業亦之に隨ふとあります、信じたる身に稱

名念佛を怠りてはならぬ、他人の稱へぬのに自身ばかり餘り稱へたら稱名正因なりといはれはすまひ歟ど、心配するものもなきにあらず、其樣な人は全く信心未決定にして、大恩を荷ばぬ人に相違ありませぬ、右に引た往生要集は御緣遠き故に知らぬといひ譯はしても御緣近き歎異鈔を知らぬとは申されまひ、其文に當時專修念佛の人と聖道門の人と法論を企て、我宗こそ勝れたれ他の宗は劣りなりといふほどに法敵も出て來り謗法もおこるなり、是しかしながら自ら我法を破謗するにあらずや、たとひ諸門こそりて念佛は甲斐なき人のためなり、その宗淺し賤しといふとも更に爭はずして、我等が如く下根の凡夫一文不通のもの丶信ずれば助かるよし承りて信じ候へば、さらに上根の人のためには賤くとも、我等がためには最上の法にてまします、たとひ自餘の教法は勝れたりとも、自らかためには

技量及はされはつとめかたし、我も人も生死を離れんこそこそ諸佛の御本意にておはしませは御妨けあるべからずして、にくひ氣せずば誰れの人がありて仇をなすべきや、且つは諍論の處にはもろ〳〵の煩惱おこる、智者遠離すべきよしの證文候にこそ、故聖人の仰せには此法をは信ずる衆生もあり誹る衆生もあるべしと佛說きおかせたまひたるなれは、我はすでに信じたてまつる、又人ありて誹るにて、佛說まことなりけりと知られ候、しかれば往生はいよ〳〵一定とおもひたまふべきなり」と仰せられてあります、何と既往の誤りをみせて頂く鏡てあるまひ歟、敢て遠慮の入らぬは信後報謝の稱名念佛で御座います、物知り顏に聞き覺えの文々句々を他人に語りて費す時間があるならば、稱名念佛いたしませふ、實果のなきものは都て戲論に屬します、顏に靑筋張て口に泡吹散しつ丶、勝ち得た所

で他力眞宗の門外に出走する外はなひのです、稱へて淨土へ參らふといふ如き往生目的の稱名念佛なら、全然自力なれども眞實信心の行者は雲の龍に隨ふが如く、御恩報謝の稱名相續は當然であります和讃に眞實信心の稱名は、彌陀廻向の法なれば不廻向となづけてぞ自力の稱念きらはるゝ、と仰せられてありて參らせ心にて申す念佛は斥けねばならぬ、只下されこゝろにて南無阿彌陀佛〳〵と申すは他力念佛なるもへ、稱名正因に陷る怖れは毛頭ありませぬ。

第四十八　煩惱に窮して大悲の親を懷ふ

往生要集（無間修の下）に要決に云く、常に念佛して往生の心を作す、一切の時に於て心恒に想ひ巧む、譬へば人あり他の抄掠を被ぶり、身は下賤と爲り備さに難辛を受け、忽ち父母を思ふ走りて本國に歸らんと欲す、行裝未だ辨ぜず由他鄉に在り日夜思惟す、苦恐ふに堪へず、時暫くも父母を念はさるはなし、計を爲し既に成り、便ち歸り達することを得、父母に親近し縱任に歡娛する如し、行者亦然り往煩惱に因て善心を壞亂し、福智珍財幷に皆散失し生死に沈み制せられて自由ならず、恒に魔王に與して僕使となり、六道に驅馳し身心を苦切す、今善緣に遇ひ忽ち彌陀慈父弘願に違せず、群生を濟度したまふを聞き、日夜驚忙心を發し、往を願す所以に精勤して倦ます、當に佛恩を念し報盡を期と爲し、心恒に計念すべし、導師云く心々相續し餘業を以て間へさるべし、又貪瞋等をもて間へされ隨犯隨懺念を隔て時を隔て日を隔てしめす、常に淸淨ならしめよ、私云晝夜六時或は三時、二時要て方法を具し精勤修習し、其餘の時處威儀を求めず、方法を論せず、心口廢することなく、常に應に念佛すべしとは、惠心僧都の我々に遺したまへる教訓にして、今之を

俗話にすれば、遊蕩して旅窓に客となりて居るもの竊盗にあふたれども、夢中之を知らなかつた、宿の主人の告げに驚き、歸國せんにも一錢なし、乃て主人の斡旋により某役場の書記となり、大に艱難辛苦した其時、平生父母を思ひ出しもしなかつた身か父母を慕ふの念増長し、忘れんとしても忘れ兼るまてに成た、起るも親を思ひ、寐るも親を思ひ、夢にも幻にも親を思ふて奉公し、旅費に不足を感ぜぬ樣になり、歸國の上父母にあふて歡喜を極めた如く、行者も福智の貯へは六賊に奪はれ、恒に冤王の僕となり、煩惱に逐はれて大悲の親を思ひ、信心相續彌増しに稱名念佛して、畢命を期とするのであるこの仰せであります、惠心僧都は晝夜六時、或は三時二時方法を具へて、精勤修習すると仰せられてある、若し此御言のみなれば我々に叶はぬけれども、次に其餘時と處に威儀を求めず、方法を

論せず心口廢することなく、常に念佛すべしと仰せられてあれば、行住座臥時處諸緣をゐらはすきらはすといふ事も、心易き事であります、和讃に男女貴賤こと〳〵く、彌陀の名號稱するに行住座臥もゐらはれす、時處諸緣もさはりなしと御述へ遊ばしたか、此思召でありませふ、止めんと欲して止まらぬ、煩惱の强盛に就て、いよ〳〵大悲の親を慕ひ時をいはす處をいはす、行住座臥に男女貴賤こと〳〵く、大悲の御親を呼ひませふ南無阿彌陀佛〳〵。

第四十九　奇なる哉佛力不思議

華嚴經に說て奇なる哉〳〵と重ねたるは、十數回繰返して讃嘆するのに齊しひのてあります、皇族の妃殿下か御姙娠ときけは、皇族の御子樣なるを怪むものはなひ、敢て奇なりとはいはぬ、車夫の娘が皇族の種を宿したときかは、其は奇なりといふに相違なひ、三井や

岩崎の主人が部屋にいつも十萬圓ありといはゞ敢て怪みも致すまひが、乞丐の小屋に十萬圓蓄へてあるときかば、其は奇なりと申すに相違あるまひ、信心よろこぶその人を、如來とひとしとときたまふ大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なり、一念歸命の時凡夫が如來の種を宿し、彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の主になるなり、車夫の娘が皇族の母と成たよりも、乞食の小屋に十萬圓いつも蓄へてあるといふよりも、奇なりといふへきは我々の身の上でありますまひ歟、是固より自己勤修の力ではなひ、佛力不思議の爲したまふ所なるゆへ、大恩を忘れてはなりませぬ、恩を知りて恩を報ぜざるは、畜生に類すと龍樹大士は大智度論に誡めてあります、恩を知りて恩を報するといふは、何を要點とするぞと申せば、唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩と仰せられてありて、たゞ佛名を稱ふるのみでありま

す。

第五十　我が使に我と來にけり

涅槃經には、一切衆生悉有佛性と說きたまひてあります、奇なる哉〳〵である、斯く讃嘆すると同時に哀れなる哉〳〵と慨歎すへきであるまひ歟、寶なくして貧に困むは道理なれども、寶を有しつゝ其を知らずに貧困を訴ふるものありとすれば、哀れなる哉愚かなる哉と申さねばならぬ、悉有佛性を知らずして、迷ひに苦み居るは寶を有しながら、知らずに貧苦を訴ふるのと類を同ふするといふものであるまひ歟、富豪の家に嗣子なし依て嗣子を他より入れて養はんといふ時、主人は車夫某を指點した、車夫と聞ては誰も怪むべきなれども、其實は主人が壯年時代に在ての隱し子なるゆへ、現在の身分こそ違ひあれ血統上水の雜らぬ、眞實の親子なれば戸籍も附替嗣子

に定めたが、本人の車夫は未だ其事を知らず、車夫組合が寄て居て汝は幸福者であるといへば何の幸福も別になひ、未だ尻の下も定らぬ身の上、今日一日〳〵と乘客を命の親として、明し暮すのよこいふて居れども、親の方では幾百萬圓といふ身代を讓ることに定めて有たのである、今も凡夫の車夫は六道輪廻の車を曳て、僅少の世善を力とし、眞實の親を知らずに居れども、大悲の親の方には幾百萬圓でなひ、無量無邊無導の光明の上に、壽命無量の大身代を悉皆讓り與へて下さる御用意が出來たのである、其を知らずに苦む凡夫を不憫に思食て、遠くは娑婆往來八千邊と御出現ありて導きたまふが釋迦如來近くは人傳にもれもやせんと、此たびは我れが使に我れと來にけりと、御出世まし〳〵た、敬禮大慈阿彌陀如來卽我宗祖見眞大師が眞實の親を知らせて下されたのであります、車夫より幾百萬圓の身代に登りてさへ、奇なる哉といふに、凡夫が直に南無阿彌陀佛の主になるとは、不思議の中の不思議であるまひ歟。

第五十一　悉有佛性

一切衆生悉有佛性とある、涅槃經の佛說を聞て、他力の大恩を輕んずる樣の事が有てはなりませぬから、御話致して置ねばならぬ、今日まで他力廻向の出れを聞た身か、悉有佛性と聞て天窓から全然他力の大恩を投棄もしますまひけれども、一荷の御恩を片荷たけは下ろしてよからふと思ふ位には必ずなりかねぬのである、乃ち千邊の念佛も、五百に減じ二度の勤行も一度にして置くといふ樣に成て、終に全然御報謝を廢することになるであらふ、和讃に信心よろこぶその人を、如來とひとしと說きたまふ、大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なりと仰せられてありて、佛性ありと申せばこて、衆生

の方に固有といふ事ではなひ、佛智の滿入より申すのである、牛や馬の踏み凹めた足跡、濁り水の溜る中に清淨潔白の月をみるは、何故であらふ足跡に溜りた濁水中に月があるのではなひ、仰く高天の月影であるといふ事ほ、誰れ一人危ふむものはあるまひ、高天の月影なる故に、水中無月と遮することは出來ぬのも合點し易き道理でありませふ、凡夫の方は牛や馬の踏み凹めた足跡の濁水に比すべき貪瞋煩惱ばかりなれども、十刧正覺の曉天に、設我得佛不取正覺の月上り衆生貪瞋煩惱中能生淸淨願往生心と濁水の心中に移りてみれば佛性なしとはいふべからずである、然れども水中の月は水中に出來てあるものにあらずして、天上の月の全體が宿りたものといふ事を忘れてはなりませぬ、往生一定御助治定の金剛心は、所謂水中の月である、凡夫の心中に有た出來たと申す事はなりませぬ、助けすんば救はすんばの誓願、成就の天月が宿りて下されたのである、依て佛智他力の授けによりて、本願の由來を存知するものなりと、御化導なされて御座います。

第五十二　敵を慈悲に懷けよ

破邪顯正のために命を存へんと願ふは、最も善き心得なれども、佛法を己が喰物にして居るのみならば、敢て賞すること出來ませぬ、自ら正法を信行せずに破邪せんとしても、自身の店を空にして置て他人の店を誹るの類となります、天理教の如きものを宗教として許す當局者の意が知れぬ、兎やせん角やせんと騷ぎ廻る人もありますが、許す當局者の意が知れぬばかりではなひ、騷き廻る人の意も知れぬのであるまひ歟、邪教を滅したひ正法を弘通し度ものならば、自ら正法を信受奉行して居らねばならぬ、其は云ふまでもなひ事で

あると申さるゝのであらふ、然れば信受奉行の身が騒ぎ廻るには及びませぬ、自信教人信と樂み〳〵淨土行の道中を進めばよひのです破邪顯正といふ事は一鎖の言なれども、破邪と顯正とを離して働きをみる時は、大に其功に差を生するものであります、顯正はそのまゝ破邪の力を有し、破邪はそのまゝ顯正になりませぬ、殊に自ら安心決定なく佛祖の御恩も知らず、只佛法を世渡りの道具に使用し、肉身を養ふ喰物にして居る樣なものが、何程護法と呼ひ扶宗と叫ひつゝ破邪顯正に騒ぎ廻りても寸功ありませぬ、其樣な煩惱に肥料を施す世話やめて、佛願を信し佛名を稱へ王法を守り、一生涯を美くしく終り、淨土に往生遂けた後、還相廻向に働ひて下さひ、二十歳より七十歳まで五十年間破邪顯正に騒ぎ廻ると假定なされ、學問や智慧で凡夫が心配したのは高の知れたものである、若し七十までの

積りが五十にて終るときは、僅に三十年の骨折てあるから、五人か十人導く位に止りませふ、其かたとひ五十まで保たすして、夭死するとも信心決定の行者で有たならは、忽ち還相廻向の利益にて邪路に走る其者を憎ます怒らず、皆悉く慈悲の翼に温めつゝ、廻心懺悔させること容易なるに相異なひ、されは百年此世に存生して勤めた功よりも、今日世緣盡く身の淨土へ轉生しての功が速かにして、且つ廣大であるといふべし、一宗の繁昌といふことは人の多く集り威の大なることにてはなく候、一人なりとも信をうるを宗の繁昌と申すなりとは、蓮如上人の御言である、とは皆これ知る所でありませふ邪教〳〵と他を憎み、罵る口を信し稱へよとある、御教化を用ふる方に使ふか宜しひ。

第五十三　教とは淨土參の道中記

謹案淨土眞宗有二種廻向一者往相二者還相就往相廻向有眞實教行信證と、御本典第一に御述へなされてあります、往相とは淨土參の道具立である、其中に教行信證といふ四法がありて、之を能所詮に分けますれば教は能詮の法にして、行信證は所詮の法であります、能詮の教によりて、行信證を知るのである、故に教は淨土參の道中記であるが、行は何でありませふ、近く云ふ、旅費の金錢である道中記はありても、旅費はありても、行く氣のなひものは一も必用はなひ、今は萬德圓滿の旅費も忻淨厭穢の信心も、淨土參の案内記も、一として不足なきが爲め、往生成佛の宿望を遂け、大悲の恩顏に近付事が出來るのである、五年十年心頭に掛て居た本山參詣が、時機相熟して御眞影樣の前に跪ひた時の歡喜でさへ、言語に餘り筆紙に盡せぬであるのに、無始已來の初事に解くこと叶はなかつ

た、煩惱の繫縛を離れ光明無量の淨土へ到達して驚かすには居られますまひ、あての違ふた嬉しさのあるは淨土へ行た時であると、先德の仰せられたを頂くに付て、是亦我の道中記極樂參の案内記と信せられます。

第五十四　宗體と金獅子

眞實之教淨土眞宗大無量壽經是也と、我宗祖大師は一宗開闢の本典に御示しなされてありて、正依の佛經といはゞ、大無量壽經であります、此經の宗要といふときは本願にして、經體をいふときは名號であります、故に說如來本願爲經宗致卽以佛名號爲經體也と仰せられてあります、床にある金獅子の香爐をもて申せは、鋭き眼ありたくましき手足あり耳あり鼻あり、頭と呼ひ尻と呼ふ、其名の變りてあるだけ用きも別れてある、是が宗といふものである、然れど、

も何をもて造りし獅子そといは、黄金をもて出來上りたものなれは頭も黄金なり、尻も黄金なり、眼も黄金なり鼻も黄金なり、耳も口も黄金なり脊も腹も黄金なり、全身黄金ならさるはなし、是が體といふものである、大經の中に於て十七願は大行成就なり、十八願は大信成就なり、十一願は證果を誓ひ十二十三は光壽を誓ひたまふといふは宗である、其大行は何物そ大信は何物そといは、信といふも南無阿彌陀佛、行といふも南無阿彌陀佛、證果といふも光壽といふも、一部始終南無阿彌陀佛ならさるはなしである、獅子の全身悉く黄金なる如く、全體皆是南無阿彌陀佛の名號であります。

第五十五　六字の玉を知る下和は誰そ

祖師聖人の化導によりて、法藏因位の本誓を聞くと先德が御讃嘆なされてある如く、宗祖大師の御見識より堀出して下されたる六字の玉なれは、御恩を報謝せねばならぬ、下和は玉を獻したる爲に手を切られ、足を切られましたれとも、罪人ではなひ、玉を玉とみる識者が無かつた故である、依て手足を失ふても屈せすに居たのは、下和で有た、宗祖大師は六字の玉を輝かさんとしたまひたるために、越後の國府へ左遷の身とならせられたれとも、少しも恨みたまはぬのみならす、大師聖人若し流刑に處せられたまはすんは、我亦配所に趣んや若し我れ配所に趣かすんは、何によりてか邊鄙の群類を化せん、是猶師教の恩致なりと仰せられた、慈悲と勇氣に富てまし〳〵た故、終に廣く法藏を開て凡小を愍れみ、選んて功德の寶を施したまふ、彌陀の佛意も廣く道教を開き、眞實之利を惠まんと思召す釋迦の佛意も共に知られ、明かに琢磨し上た六字の玉を、我々居なから御受け申上け、行く先に付て往生にいかゝの疊り氣なく、明信佛

智の仕合餘の功德善根に心掛らす後をよろこふ歡喜あり、今をよろこふ慶喜あり私ならぬ他力の賜物、報しても報すへく謝しても謝すへきは、佛恩師恩で御座います。

第五十六　信行共に佛智の施與

信せられた故疑ひかなひ、稱へられる故有難ひ是なら參られるに相違なからふなど、いふものがある、六ケしひ領解であるまひ歟、成程教行信證をもて基礎したまふ眞宗の建立、殊に信卷には別序を案せらるゝ程に、信の肝要を知らせて下されてあれは、信せねば淨土へ往生は叶はぬといふ事は申す迄もなひが、我機の方に力を持て貰ふてはなりませぬ、本山參りするものは旅行案内と旅費の金錢を要する如く、淨土へ往生せんと願ふものは、教といふ旅行案内と行といふ、旅費の金錢が必要である、たとひ明細なる旅行案内によりて

滊車の發著滊船の聯絡は分り旅費の金錢は優に備はりても、舟車の轉覆沈没を案じ煩ひつゝ參る事に心が定らずんば、案内記も金錢も用に立ちませぬ、經論釋の案内記を明細に覺へ、不足なく諸の善法を攝し、諸の德本を具する極速圓滿の大行、淨土行の旅費に不足なくとも、是て參られる歟落てはならぬなどゝいふ疑ひありては教行の所詮はなひ、參ることに安心して乘るへき舟車に乘るから、目的の本山へ到達出來るのである、今も不足なき他力廻向に疑ひなく、稱へて往生を待つ身か淨土へ到達するのである、行ける事に疑ひのなひは我力にあらす、舟車と金錢にうたがはせぬ眞實があるのである、信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起すと、宗祖大師も仰せられてあります、又の御言に信も行も如來の御誓ひを申すなりと、仰せられてあります、朝夕拜讀し拜讀なさるゝ正信偈に、至

心信樂の願を因と爲し、必至滅度の願成就なるが故なりとあるてありませふ、此二句共に願の字に著眼すべきである、先德の御言に、

『不廻向とは廻向なしといふにはあらず凡夫自力の廻向を用ひずいさゝか行者のはからひを加へず信行共に佛智の施與にあづかるかゆへに不廻向とはなつけたるなり』と仰せられてあり、何れの御教示を頂ても聞た分つた位をあてにすへき道理はありませぬ、至心信樂己れを忘れて無行不成の願海に歸しませふ。

信した力稱へた力にて、往生する樣の心得にて居る人か少なくありませぬ、是は銃身を知りて銃丸を知らさる類てあります、銃殺と申すは銃身といふ筒で殺したことではなひ、銃丸によりて殺すのである、信した疑ひ晴れた稱へらるゝといふを力にして往生を願ふ人は玉なしの銃身て殺さるゝと思ふ如くであるまひ歟、信し稱ふるは敢

て無用とはいはれぬけれとも、往生一定御助治定の安堵は信じた稱へたといふ方の用きにあらず、信せしめ稱へしめたまふ南無阿彌陀佛の玉の用きてあります。

第五十七　信後の相續は船中の娛樂

『乘り得たる身こそ安けれ船の中知らぬながらに進む彼岸』一回船に乘り込だものなれば、ねても船中おきても船中である、三人歟五人乘れば傾斜する樣な小船に安心は出來ねども、一萬噸以上の船に乘れば大安心である、雨が降ても風が吹ても、更に苦とする所はなひ、故郷の事を思ひ出して心は船に居らすとも、乘せて彼岸に近付きつゝあるは船でありませふ、泣ても笑ふても船を遠ざかる事はなひ、時々刻々乘込だ地は遠くなり、目的の地は近くなるのである、今も一回大悲の願船に乘託したる身は大安心である、一萬噸二萬噸

の船は龍骨の下た組より航海の出來るまでには、數年を經ねばならぬと申す事手間の掛りたので堅牢なる事が分る、彌陀大悲の願船は五刼の思惟永刼の修行と聽けば堅牢無比に疑ひなきもの、大安心が出來る筈である、三毒五欲の暴風駛雨も更に苦とする世話なし、浮世行の願船中に婆の事に心が掛らば、船の逆退ありといふ事もなし、浮沈窮通のさま〳〵泣く時もあり笑ふ時もあり、何一つ定りのなひ凡夫の胸、難有ひと嬉し涙に咽ぶ歟と思へば、あんなことをいはれて悔しひとやら、殘念とやら身震ひして涙を流すといふ有容我身ながら、批評に困るといはねばならぬ、かゝる身にして行先に心配の入らぬは、大悲願船中の仕合である、蓮如上人の御歌に『罪ふかく如來をたのむ身になればのりの力に西へこそゆけ』と仰せられてありて、他力廣大の利益と願船に乘託した時蒙むるのである、歐

米等へ遠洋航海して日本海に歸航し、故郷の風光を目にした時は、嬉しひものでありませう、山岳は首を動かしつゝ招くが如く、樹木は手を動かしつゝ呼ぶが如くに感ぜらるゝでありませふ、親や兄弟が待て居る故、國へ歸る船中でさへ斯くあるもの、十刼以來御待ち下さるゝ大悲の御親に近付く願船の中に居る身に、四邊の境遇が樂まれぬ筈はなひ、咲き續く花みるたびに猶も亦いと願はしき西の彼岸と先德の讀ませられた通り、花をみても鳥を聽ても流聲に付、月影に付、淨土の莊嚴を思ひ浮べ、稱名相續が出來ることである、妻子や兄弟は願船中の乘合人、何と娯ひ事であるまひ歟、馬車の二十輛や三十輛列ねて、歡迎を受たといふ貴顯紳士の身の上話を聞ても其人の幸運を想像されることであるが、算數の及ばぬ諸佛菩薩に歡迎を受る、幸運の淨土到著は餘所話に聞くのではなひ、自身の上と

思ふてみれば羽翼はなけれども、浮き揚る樣な氣持がしませふ、此樣な娯樂は、大悲の願船中に住む身にならねば知ることは出來ませぬのである。

第五十八　盲目の腰拔は我である

盲目に成ても腰さへ立つものならば、手引によりて歩行することは出來る、腰拔と成ても目さへ明かなれば文机に凭て書見することは出來る若し盲目にして腰拔けて有たならば、書見も外出も叶はぬ事でありますが、又盲目でも腰拔でも、一人づゝ離すときは見ゐれども歩めぬといふ不具者と、歩めれども見ゐぬといふ不具者なれば、一人前でなひは必定なり、然に其不具者が二人相依るときは、一人前の働きを爲す事が出來るのである、近所に火を失した已に類燒に及ばんといふ場合に、二人あり其一人は腰拔にて目に火をみて知りながら逃る事が出來ぬ、他の一人は盲目にて腰は立ちながら、同く逃る事が叶はぬ、隨分苦痛千萬である、所が二人相依て一人前となり火難を免がれたは何うした歟といふに、盲目の脊に腰拔が負はれたのである、盲目は目こそみゐね足は丈夫であるから、脊にある腰拔の指揮する如く、グン〳〵走るのでありた、腰拔は盲目の足により盲目は腰拔の目により、二人相依た爲に両足両眼の揃ふた一人前と成たゐへ、危き火難を免がれる事が出來たといふ話は、古く傳はりてあるのである、我々は近所に火を失した位の事ではなひ、無始已來煩惱の自火に當惑して居るのである、然に智惠の目は盲ひであるため知らずに居るのを教へてが有ても、腰が拔けてあるゐへ避る事が出來ませぬ、智目行足の缺けた身の上なれば、奈何ともし難き悲境に陷りて居るのを、憐みまします御方は大悲の御親ばかりである

悲智の両手をもて救ひたまひ六字の瀛車や本願の瀛船、而も別仕立と頂てみれば、珍客としての御扱ひ何處に居ても、諸佛諸菩薩諸天善神等が圍繞して御守護下され、願力不思議の信心は大菩提心なりければ、天地にみてる惡鬼神みなことゞくおそるなり、内魔外障のあることなく、無碍の一道一直線に淨土行か盲目の腰拔けまゝで出來る仕合、此所迄に至ると盲目の腰拔は我であるといはねばならぬ、身に悲歎をかこつ世話がなくなります、若し我々が一目に跛足といふ樣な不具者なからも、少しはみゐる少しはあゐめるといふ自力根性に遑まの遺られぬ身で有たら、大悲の御親にすがり兼るであらふに、川柳に所謂『不器量で據處なく貞女哉』叶はぬものから據處なく有のまゝ救ふて下さるゝと聞て、大悲の御親をたのみたてまつり、智惠もなければ願行もなきに、如來の心を心として指の先に

て押へた程も、未來いかゝの疑闇なく喜はるゝことである。

第五十九　差上た口を佛より借用せよ

身も心も共に天皇陛下へ差上たるものといふは、軍人の常套語である、されども更に自らの用を爲す事が出來ぬと申すのではなひ、公用の遑に何を爲すも差支はありませぬが、本職の分限に外れぬ樣注意を拂はねばならぬのである、一念歸命の時身も心も大悲の御親に御任せ申上たといふは、信者の常套語である、されども更に自らの用を爲すことが出來ぬのではなひ、那邊に向ふて使用するとも差支はありませぬ、只信者の分限に外れぬ樣深く注意を致さねばなりませぬ、陛下の股肱と成た軍人の失錯は、軍人一人の失錯に止まらず延て陛下に及ぶのである、大悲の佛陀と親子名乘の出來た信者の失錯は、信者一人の失錯に止まらず、引て大悲の佛陀に及ぶのである

悲智の両手をもて救ひたまひ六字の瀛車や本願の瀛船、而も別仕立と頂てみれば、珍客としての御扱ひ何處に居ても、諸佛諸菩薩諸天善神等が圍繞して御守護下され、願力不思議の信心は大菩提心なりければ、天地にみてる惡鬼神みなこと〳〵くおそるなり、内魔外障のあることなく、無碍の一道一直線に淨土行か盲目の腰拔けまゝで出來る仕合、此所迄に至ると盲目の腰拔は我であるといはねばならぬ、身に悲歎をかこつ世話がなくなります、若し我々が一目に跛足といふ樣な不具者なからも、少しはみゐる少しはあゐめるといふ自力根性に遑まの遺られぬ身で有たら、大悲の御親にすがり兼るであらふに、川柳に所謂『不器量で據處なく貞女哉』叶はぬものから據處なく有のまゝ救ふて下さるゝと聞て、大悲の御親をたのみたてまつり、智惠もなければ願行もなきに、如來の心を心として指の先に

て押へた程も、未來いかゝの疑闇なく喜はるゝことである。

第五十九　差上た口を佛より借用せよ

身も心も共に天皇陛下へ差上たるものといふは、軍人の常套語である、されども更に自らの用を爲す事が出來ぬと申すのではなひ、公用の遑に何を爲すも差支はありませぬが、本職の分限に外れぬ樣注意を拂はねばならぬのである、一念歸命の時身も心も大悲の御親に御任せ申上たといふは、信者の常套語である、されども更に自らの用を爲すことが出來ぬのではなひ、那邊に向ふて使用するとも差支はありませぬ、只信者の分限に外れぬ樣深く注意を致さねばなりませぬ、陛下の股肱と成た軍人の失錯は、軍人一人の失錯に止まらず延て陛下に及ぶのである、大悲の佛陀と親子名乘の出來た信者の失錯は、信者一人の失錯に止まらず、引て大悲の佛陀に及ぶのである

何ど畏れ多き事であるまひ歟、乃ち差上た任せたと成た上からは、我まゝにする道理はなひのです、謹愼して而して入用の時は借用しませふ、借た物なら疵付ぬ樣失はぬ樣心掛ぬが至當であらふ、身も心も共に差上た任せたといはゝ、目も鼻も耳も口も總てなりといふ事は、誰れ一人として異議はあるまひ、其中最も私に使用して失錯の出來るは口である、古來口は禍の門と申し傳へますが、實に相違なひ事であります、さればいかゞして然るやと申すに、命令を蒙りた通り用ゐるに如くはなひのです、其命令と申は、彌陀大悲の誓願をふかく信ぜんひとはみな、ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をとなふべしと仰せらるゝ事である、言ひ換れば如來の御慈悲に救はるゝ身と成たら、稱名念佛しながら御恩の下に日暮しせよとあるのである、左樣なら交際もせず商店も閉ぢ耕作も止め南無阿彌

陀佛稱へ居れといふ事歟といふに、其樣な無理な命令がある道理がなひ、商ひする店に購客が來て此品は幾干料そと尋るに對して、南無阿彌陀佛〳〵と應せよと申す事ではなひ、其時は稱へて居た口卽ち命令で稱ふる念佛は止めて、口を借用する事が出來ますから、無理の直切り方でもする客には、十分理非を分ちて應答するが宜ひです、而して客が去りました後は、徒らに借用した口ではなひと心得速に本へ戻して、南無阿彌陀佛〳〵と稱ふるのであります、斯樣にするか定則となれば、たとひ嫁の仕打が氣に入らぬから、小言いふてやらふと思ふて口の内もそ〳〵仕掛ても、否々此樣な事に借用してはならぬと、必ず氣が付くに相違なひのです、兎に角身も心も大悲の御親に御任せ申した信者は、輕々しきものでありませぬ、諸々の聖尊の重愛を受る身の上なるゆへ、深く謹愼いたしませふ。

第六十　六字を侮るな

法華經八卷文字の數は六萬九千三百八十四なれども、南無妙法蓮華經の題目、七字に收まるといふので尊とむでありませぬ歟、八卷の法華經が收まるといふ題目は、尊とひに違ひなけれども、華嚴も涅槃も收まるといふてなひ、今我々の信受奉行する南無阿彌陀佛はその數わづかに六字なれども、不可稱不可說不可思議の大功德おさまり候こと、そのまわりなきものなりとあれば、八卷や十卷の經文を收むるといふ際限あるのではなひ、初頓華嚴より終圓涅槃まで、大聖釋尊一代の說法一字として洩るゝ事なひのです、未信の人は讀經にも長短に隨て、功德の大小利益の多少ある樣に思ふて居ますものから、六字位はといふ心地が離れぬ樣である、一錢二厘三毛四絲五忽といふときは、文字が十字ある故、萬圓と交換し難ひと申すものがあらふ歟、文字は二字でも萬圓と、壹錢參厘未滿と比較をみるべき數ではあるまひ、然れば六萬九千三百八十四字の法華經八卷も六百卷ある大般若も四十卷に譯し、六十卷に譯した華嚴經も、有りとあらゆる法門の收まらぬはなひといふ、南無阿彌陀佛を侮る所はありますまひ、信じて稱へませふ、南無阿彌陀佛

第六十一　八人藝を作す勿れ

世には八方美人と呼ばるゝ人がなひではなひ、八人藝を一人にて爲すといふ人もあるであらふけれども、決して何處にも彼處にもあるといふ事はなひ筈、たとひ八方美人八人藝といふ多能者にしても、長所と認むべきは二三擧げ並へらるゝものでなひ、然るを一人前と呼ぶに覺束なひ身にてあり乍ら、此事も成就し度、彼事も仕遂げ度と四方八方に心を配り、思ふ如くならぬとて顏をしかめ、泣聲を發

するは了簡違と申さねばなりませぬ、三十年五十年の事さへ分を忘れて徒らに心配するは益なきもの、況や未來永劫に向ての後生に於てをやである、薄紙一枚の隔てあれば何物をも辨じ兼ねながら、善知識の役目も阿彌陀樣の受持も、一切合裁一手に引受て後生の一大事を捌て見樣とは、いかに愚かに我身知らずといひつゝ滑稽に近ひであるまひ歟、救ひ損してはならぬとて、五劫思惟永劫修行に圓滿具足の名號を仕上げ、我々の往生を引受たまふが阿彌陀如來の御受持である、此道に進め彼道に向ふなと教へたまふは善知識の役目である、我々の方は只すてしめたまふものをすてゐかしめたまふ所へ行くのである、何事も暗き心にはからふ事やめて、明るき佛智を信じませふ。

第六十二　助け手は利を取らぬ

負債のため零落に陥るを救ふた助けたといひながら、後には高利を貪るものも世間に少なくなひ、成程一時の急を救ふたに相違なひけれども、其救助する所の心の根底が善き名の下に、惡き利を握らんとするので眞實の慈悲ではなひのである、若し眞實の慈悲より救助したのであらば、たとひ多額の金員を投擲したるにもせよ、後に至りて返金を請求すべき道理はなひのである、救はれたものが幸運に向ひつゝ、恩を報ずる心より利を添へ、益を增して持來るを受取るは格別助け手は利を取らぬが、正當である、今我々は必墮無間の零落者でありて、阿彌陀如來は福德圓滿の救濟者である、經には我無量劫に於て大施主と爲りて、普く諸の貧苦を救はずんば正覺を成せずとの誓が說てある、是が阿彌陀如來因位の誓願である、如是の誓願成就した果名を、南無阿彌陀佛と申すのであれば、我々は只信ず

るのみ敢て他をみるに及びませぬ、御廻向の六字に不足なしと信じたら、喜ばれぬの稱へられぬのと運ひ物の不足をいふことを止めませふ、救濟者たる大悲の阿彌陀如來は、返金請求したり善き名の下に惡利を貪る類ではありませぬから、伏て我方に値ひの有無を探るより、仰ひで大悲の御手許をみたまへ、一言半句も我方に於て歎きを發せねばならぬ樣な事はなひのである、歎異鈔に彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生を遂るなりと、信じて念佛申さんと思ひ立つこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり、彌陀の本願には老少善惡の人をゑらばれず、只信心を要とすと知るべし、そのゆへは罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします、しかれば「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にますべき善なきがゆへに惡をもおそるべからず、

彌陀の本願をさまたぐる惡なきがゆへに」と仰せられてあります、何と不足なき御言であるまひ歟、稱へ不足の我々に、念佛申した後に攝取するとあらば歎かねばならぬけれども、念佛申さんと思ひ立つ心のおこるとき、攝取したまふと聞たら何とした喜ひつゝ念佛申さねばならぬのである、聖者善人を助けんが爲の本願とあらば、泣き暮さねばならねども、惡罪深重煩惱熾盛の衆生を助けんが爲の願と聞たら、何とした御慈悲そと仰ぎつゝ喜ばるゝ事である、何れの方面よりも隙間のなひ本願にして、我々の洩るゝこゝなき樣成就したまひたのであれば、遠慮なく有のまゝ信じ有のまゝ稱へ、我手許の出來不出來をみずに、いつもかはらぬ御助けの丈夫なる御手許を仰ぎませう。

第六十三　華落蓮成

爲蓮華故、華開蓮現、華落蓮成、と申す事は法華の所談であります
が、隨宜轉用して三蓮華の御話を申してみませふ、大經に若し人善
本無ければ斯經を聞くことを得ず、清淨に戒を有てる者、乃し正法
を聞くを獲ると說きたまひてありて、苟くも正法を聞くことは宿善
なければ叶はぬのである、信心が住生の因とあれば信心決定さへす
れば、宿善は入らぬでなひ歟といふ議論が起らぬとも申せぬが、そ
の信心決定するのは宿善によらねば叶はぬのである、尅實するとき
は淨土參の結果をうれば、信心も入らぬといふ道理なれども、其結
果をうる所の因は信心である、果實が要にして花に要する所なしと
捨る譯に行かぬは何故ぞと申すに、果實のために花を開く、是が卽
ち爲蓮故華である、淨土參の結果のために信心の花を開く、所謂爲
蓮故華は宿善と申してよからふ、信心決定の花開けて明に證果の實

を獲るに定まるは、所謂華開蓮現と申すべきである、その現はるゝ
果實はあらはるゝ時、成就するといふのではなひ、未だ華の開かぬ
前に成就して有た果實でありまず、されども開くまではみることは
出來ぬ、又開けて現はれた果實は華落る時分に充分に成るのである
我々も信心決定して、證果を期しつゝ彌陀同體となるは、所謂華落
蓮成にて此世を終る時と知らねばならぬ。

第六十四　因果と因緣

因は因種と熟し果は果實と熟する文字である、現今世上に原因結果
といふ文字の多く出るも、矢張我佛教の因果說より流れ出たのであ
らふと思ふ、乃て因果と因緣との全同ならぬ譯を一寸申して置きま
せふと思ふは外でなひ、因果因緣を同樣に心得て居るものが少なく
なひ樣である、因果の名は一物の上に立つけれども、因緣の名は二

物以上でなければ立たぬのが多ひ樣であります、一粒の米を以て云はゞ、蒔く時は秋に收むべきの因と名けますれども、其蒔く米は何時の物と尋るに昨年收穫の米と應ぜねばならぬ、昨年收穫の米ならば果と名くべき物である、如是一粒の米に就ても前後所望の不同によりて、因といはれ果といはれます、因緣と申すは果を含む所の因と、それを助成する物とを並べて呼ぶ名であります、一粒の米は蒔て萬倍となる物なるも、袋に入れ俵に置くときは、幾年經つとも含んだ果をあらはす事はありませぬ、田地へ蒔て雨露の潤と、太陽の光を受る緣によりて、一粒萬倍の果を成ずるのである、我等が報土往生の因は信心にして、無上菩提の果を成するといふも、因緣なくんば叶ひませぬのである、行卷に德號の慈父いまさずんば能生の因闕けなん、光明の悲母いまさずんば所生の緣乖きなん、能所因緣和

合して信心の業識を成すと仰せられ、且而してその信心の業識が內因と成た後は、光明名號の父母は外緣となりて、佛果を得せしむると申す、両重の因緣を委く明したまひてあります、總て內を成すれは因にして、外より扶助するは緣である、斯樣の道理でありますから、因果を知ても因緣を知らざる時は、米の俵や袋を積て置て、田地へ蒔くことを忘るゝ樣な滑稽を生じます、速に如來の本願を信じ如來の名號を稱へ、王法仁義の道に外れぬ樣、對手に於ても善に近寄り惡に遠ざかる樣にしませふ。

第六十五　素人には美を飾れ

阿彌陀如來の本願は本爲凡夫兼爲聖人である、凡夫は無善造惡が至當なり、敢て飾るに及ばぬなどゝ放逸無慚に暮すものがある、斯樣な心得違を振り廻すために、局外者より非難を受けて、佛法に負傷

させる樣考へられます、固より凡夫の地金は無善造惡唯知作惡なれども、其地金承知の上救ひたまふ佛願に歸入した眞實信心の行者なら、地金を形の上にあらはしてはなりませぬ、美を飾るといはゞ語弊がある歟も知らぬが、除く事の出來ぬ地金を內に蓄へ居る凡夫も、形の上をつゝしむのは、先美を飾ると申さねばならぬ、從前は反物の包紙に飾りはなき樣で有たが、近來は意匠に意匠を疑し、美を飾るのが流行します、緇人中間には敢て飾も入らねど素人には飾りが大に必要である、有のまゝといふ言も、佛法信者の中間に有難く聞にますれども、局外者が其言を聞くと何の言たるやゝ有のまゝとは餘りに放任過るに非ずやといふ不審を起すに相違なひ、有のまゝの一語さへ不審を起す人達に、珠數持ちながら眼を怒らして手を振上げたり、念佛する口にて慈善事業の相談を破る事に務めたりする樣なものを見聞させたら、佛法を有害無益と罵詈する筈です、珠數持て念佛稱へ乍ら、右樣の振舞を爲すものは、佛法を假面に被りた、僞信者にして、佛法が敎へたる所作にあらねども、局外者の素人は其區別をみるの眼はありませぬから、是非共無宗敎無信者とは色の替りある美を表はすが必要であります、王法をもて本とせよ、仁義をもて先とせよと、俗諦門の嚴誡は全く是がためである、罪ありながらの御許しは眞諦門中安心內に於ての事、決して他に持出してはなりませぬ、彼人の眞似なりともすべきであると、素人が慕ひ來る樣するは、俗諦の美色を飾るに如くはなひので御座います。

第六十六　六根六識は臼

六根とは眼耳鼻舌身意なり、六識とは六根によて色聲香味觸法の六境を見聞知する心なり、眼根より入り來る靑黃赤白長短方圓等を見

取りて、之を愛憎し耳根より入り來る音聲の一切を聽取て、或は喜び或は怒り、鼻根より入り來る香氣の總てを嗅ぎ取て、好み且つ嫌ひ、舌根より入來る味の濃淡を嘗め分る等、臼の上下ありて物を篩ひ出すが如く、六根は上臼となり六識は下臼となり、上下轉輾無量の煩惱を篩ひ出すのである。

第六十七　法席は稽古場である

列席なされた多人數の中、一人も二諦相依の宗意に背く方はなひ樣である、何方をみても柔輭の顏付にて心の底に一點の黑星なさそうである、併此席を去られた後續ひて行くであらふ歟、否といふに、二の足はなひであらふ歟、斯く申さば其懸疑は誰れに對して起りました、玉石混視されては困りますから指名して下さひといはるゝ方があるも知れぬけれども、道人は指名しませぬ、若し指名した爲めに讒謗律に觸れてはならぬ、大體斯樣な法席にて柔輭なるいかにも正定聚の菩薩なるならむと思はせる御方が法席を去て、我家へ歸ると忽ち模樣替りとなりて、世の嘲笑を受ることのあるは、法席の舞臺と心得居る所以であらふ、其は大なる誤りであります、法席に在ては笑顏に南無阿彌陀佛〳〵とやさしき聲に稱へたのが、我家へ歸るとやれ〳〵舞臺が首尾能く了へた、是からは樂屋といふ心得にて謹みの羽織を脫ぎ柔輭の帶も解て仕舞ふにより、亂暴狼藉な演劇が始まるのである、將來は誤りを正すことに致しませふ、いかゞ誤正するそと申さば、先法席を稽古場と心得、我家を舞臺と思ひ換て貰ひませふ、稽古場では行屆かぬ邊を注意し質正するのであります、舞臺に出た時は、行屆かぬ所なき樣に十分稽古致すのが俳優者の身の上である、今も法席の稽古場に於て指南にあつかる二諦相依の興

言踊り樣語り樣、能く心得て我家の舞臺に在ては、由良の助が伴内の云ふことを口にしたり、おかるが着物の裾蹇らげて、暫く〳〵と平右衛門の代理する樣な顛倒を演じなひ樣、親は親の分限を忘れず子は子の分限を守り、夫婦も兄弟も皆悉く其身〳〵の役割を立派に踊らねばならぬのである、夫が今日までは我家は樂屋で、法席が舞臺といふ積りで有たから、法席に在てはやさしき顏に笑を含みながら殊勝に念佛申した嫁が、我家へ歸りた時姑が何處か寄て居たの歟遲かつたことねーといふと、直ぐ火の樣にあつく眞赤になりて、何處へもよりは致しませぬ、御隣りの嫁さんにお聞き下さひ、今連れ立て來たのですといへば其椽に赤くならなくつてもいひぢやなひ歟と詰る、其樣な無理いはれて腹が立たずに居れませぬなど〳〵、相互に鞘あてが始まるのである、乃て顛倒して居た心得誤りを改めると

たとひ臍の下にてぶつ〳〵小言が涌き掛ても、御指南を受た身であるものと相互に美くしく世を過さるゝ事になります。

第六十八　伊蘭林と栴檀の二葉

淨飯大王が釋尊に對して仰せられます樣には、幾萬の人が化導を受る中に肉緣よりいへば親と成て居ながら未だ教へを受けず甚だ遺憾である、何卒有緣の法を授けられよと、此時大聖釋尊のたまふ樣、念佛三昧したまふべしと、此教へを聞かせられた、父淨飯王は二個の不審を抱かせられた、其一は多少勞すべく思召す所へ、只念佛三昧せよとの教を聞き、餘り心易さに此樣な事でよひのであるふ歟といふ御不審である、今一つは念佛三昧の心易きだけ、功德も隨て少なからんといふの御不審である、畢竟他に勝れた修行を教へ乍ら、老の身と侮り粗末の法を授くるものなるべしと、御不足の念が起り

たのであります、乃て釋尊は譬喩をもて御諭しが有たのです、父君よ四十由旬の伊蘭林は美は美なれでも惡臭他に比なし、深く此臭氣を吸込めば煩悶苦痛し氣絶致します、然に其林中に牛頭栴檀の芽を生しまするこ、比類なき所の惡臭が漸々減少し、成長の頃には滿林か栴檀の香氣に變しますのである、念佛三昧は栴檀の二葉の如し、煩惱妄念の伊蘭林をして力なからしむるのでありますこ、仰せられました、又心易さに念佛三昧を劣れるものこ思召ての御不審も、畧々前の譬喩にて御了解なる筈、若し勞せんこの御望みならば私の如く、捨家棄欲出家發心の本道を御進みなさらねばなりませぬ、出家發心せず在家のまゝ未來安心なされたくば、念佛三昧に如くものはありませぬ、この御諭しに、父の大王も二個の御不審はれまして、御安心なされたと申す事である（近くは安樂集上を見るべし）昔話

として之を聞き流しにしてはなりませぬ、伊蘭林といふは遠き印度に在て此所になひのではなひ、家屋が欲ひ田畑が欲ひ、皆是貪欲の伊蘭林である、遊廓を通過し太鼓や三味線の音を耳にし、藝娼妓の影を眼にし舌打鳴して遊客を羨む、是亦貪欲の伊蘭林である、伊蘭林の惡臭も一回や二回嗅込でも氣絶するまでには至らぬ、度を重ねて深く嗅込こ、終に悶絶しますのである、一回や二回の遊廓狂ひには經濟の氣絶もあるまひか、度を重ねると氣絶せずに置けませぬ、四十由旬といふ限りのある伊蘭林ならで、無量無邊といふ煩惱の伊蘭林、强き惡臭は法命を奪ひ去ること必定である、斯く恐ろしき伊蘭林にも生ずる所の栴檀こ申すは、南無阿彌陀佛であります、衆生貪瞋煩惱中能生淨願往生心こ生へたる、二葉は目にみねねども、此機は替らぬこ頂けは一日に一度位は、嫁泣かせても宜しふ御座いま

す歟など、問ふた身を、いつの間にやら懺悔を起し、厭味のみに語を交へた間柄も、稱名しながら顔見合せる樣になり、嫁と姑は手を引き合ひ、深き因緣あればこそ親子と成て暮すなれ、此世ばかりに終りてはならぬ、未來も共に蓮臺の上と、喜び〳〵淨土行の道中に一世を過し渡る樣になるから近所近邊中のものが嫌ふた以前に振り替り、近所近邊中の譽めものとなり、諺に云ふ惡に强ければ善にも强しとは彼人の事である、澁の强ひ柿程秋日に干して甘くなる道理に同じきは彼人であると、誰れ彼れなして慕ふて來る樣になるのは全く栴檀の二葉が生長したる證據であるまひ歟、南無阿彌陀佛をとなふれは、此世の利益きはもなし、伊蘭林の他に移さずとも栴檀の德にて惡臭の力なき樣になる如く、貪瞋煩惱を除かねども六字の栴檀の德によりて、煩惱の伊蘭林は無きも同樣になるのである、何と嬉しひ事であるまひ歟、龍舒淨土文の中に念佛する口は薰香を吐く如しといへるも、是等の消息を洩すものでありませふ。

第六十九　敵にも恩はあるもの

他人の短所を抉て誹るのを手柄にするものが世に少なくありませぬか、甚だ氣の狹ひ量の小さひ人と申さねばならぬ、俗に馬鹿も鋏に似て使ひ樣で剪れると申す如く、長所を取れば捨つべきものはなひのです、維新前は德川時代三百年間太平の夢を貪り、僧侶は宗判の全權者所謂戸籍頭となりて居て、枕を高ふし安眠に日夜を送るといふ本分外れのものが多かつた、維新當初の革命幕代りに成た時は、排佛毀釋といふ樣な荒風が吹き出し、神道一手に宗教を捌く新店が開けた有容、其が暫くすると信教自由といふ舶來風即耶蘇教のため一段打擊を蒙りた、佛教も開店する事に成た、されば敵にみる耶蘇

教にも恩ありと謝すべきであるまひ歟、固より排佛毀釈を救はんといふ親切から、信教自由を持て來た耶蘇教ではなひけれども、其がため復活したとすれば恩なしといほれませぬ、其他彼れによりて我の弊風を矯す點のあるは小なくありませぬ、所謂他山の石である、敵國外患なければ其國亡ぶと古來云ひ傳へたは、格言であるといふ事が分る、徳川時代の末路は太平に眠りて居た佛教僧侶を、排佛毀釈の聲高く成た筈、いよ〳〵覺めた眼の惰眠に沈まぬ樣養はねばなりませぬ。

第七十　活潑の氣象を養へ

他宗の事は知らぬが、眞宗の信徒には活潑の氣象が乏しひ樣である活潑と申して飛び揚りの事ではなひ、聲大きくして傍若無人の言あるを活潑といひ、下駄の齒の缺くるをも搆はず驅け歩く事をば活潑

といふものあり、是等は飛揚りと名付くべき類であらふ、活潑とは字の如く生きて働く勢力を云ふのであるから、聲は細小なるも歩行は靜かでも其語ること行ふことが死物とならず、活動するなれば眞の活潑であります、大津の源右衛門が御眞影を受取んため生首を惜まなかつた、昔話を聞てさへ首を縮める樣な氣意地なしが多ひ樣である、今日若し大法のために生首が必要であるから生首募集するといふ事に成たら、明治の源右衛門はありませふ歟、源右衛門はあらふけれども意志を繼く信徒はあるまひと思ふ、五十以上六十に近くなりたものなら蠟燭の殘屑よりも粗末の身の上、國家の御用佛法の御爲めならば、生首位は何時でも取て下されと申してよからふでなひ歟、されど未來に宿の定りでなひ間は、此口は明きにくからふが本願を信受した卽得往生の身の上なら、腐る肉體は惜氣なく差出し

てもよからふ、斯く決心の定まつたものならば、何に付ても活氣が具はり擧動のすへてかいきくしします、さりとて死を急げといふ事ではなひ、徒らに大切の命を亡ふてはならぬ、依て飛揚りは嫌ふのである、只心の据りを丈夫にして事に當りて驚かず騷がず、一朝事の重大なるに向はゞ、一死以し國家と佛法の爲には報ふといふ活潑を有せよと勸むるのである、腐る肉體上より死ここそいへ、消ねぬ精神上よりは彼安養國に生るゝのであるもの活潑の氣象となる道理である、信受本願は前念命終なり即得往生は後念即生なり、心に於ては已に迷の命終りたのである、肉體に惜氣なきは自然の道理である。

第七十一　自ら省みて虚言吐くな

虚言をいふと思はずに虚言をいふ事がある、其はいかなる場合そと申すに、主人の命によりて風呂敷包を他の家に持て行た、然に其包は他の物と取誤りて行た爲に、先方にて不審に思ひ、此包は此所へ來るべき物の樣に思はれぬが何歟の間違でなひ歟と質したるに、決して間違ありませぬと答へた、是等の類は澤山にあることであらふと思ふ、敢て虚言をもて答ふる思ひはなくして、其實は虚言を答へたのであります　かゝる場合には質問を受た當時自ら省みねばならぬのです、主人の命によりて持來りたのに屆先は間違なひか、若し他の包と取誤りて持來たのではなかつた歟と、考一考すれば直に虚言を云ふ樣な事はありませぬ、佛教信者の領解を述るにも、斯樣の類か多くあらふと思ひます、よく〳〵聽聞して我機任せをせぬ樣に致さねばならぬ、先德の御言に、我が心任せの領解に於ては必ず〳〵誤りあるものなりと、嚴誡なされてあります、他の物と取誤り

て持來りた事を承知しつゝ、決して間違なひと答へば出來ぬ筈、全く間違はぬ積りて間違なひと質問に對して應答したのであるけれども遂に虚言をいふた事に成たのは、所謂我心任せの領解で有た故でせふ、畢竟凡夫は虚假のみなれば、是でよからふ歟わるからふ歟と案し煩ふ事は廢止して、只佛智の不思議を信じて念佛いたしませふ信卷に一切群生海無始より己來乃至今日今時まで、穢惡汚染にして清淨の心なし、虚假諂僞にして眞實の心なし、是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫し、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行したまひし時、三業の所修一念一刹那も清淨ならさるなく眞實ならざるなく、如來は清淨眞心を以て、圓融無碍不可思議不可稱不可說の至德を成就し、如來の至心を以て諸有の一切煩惱惡業邪智の羣生海に回施したまふ、則是利他の眞心を彰はす故に疑蓋雜はることなし、斯

至心則是至德の尊號を其體と爲すなり」等と仰せられてあります、我等は無始已來の虚假不實であれば、三十年や五十年の修繕にして淨淨眞實になる道理はありませぬ、されば自力をすて、如來の清淨眞心をもて成就したまひし至德の尊號を受け奉り、不可稱不可說不可思議の功德の主となるに如くはありませぬ、生ま聽きし得た顏し述べたる言語に疵付られぬのを領解の至極と思ふ樣では、後ろ恥かしひ事でありませぬ歟。

第七十二　他力とは我計度の入らぬ事

先德の御言に他力とはわがはからひの入らぬことなりと仰せられてあります、反物を購求し產衣を製して居る婦人がある、何誰の衣服である歟と問へば、莞爾として笑みながら初孫に着せますのであると答へた、其孫さんは何れにと質せば未だ生れはしませぬと答へた

未だ生れもせぬのに準備をするは何故であらふ、間違なく生るゝ事を見認めた故である、若しも準備が出來てなかつたならば生れた時に産婦は狼狽するであらふ、産婦の狼狽せぬ樣に準備するは親の慈悲と智惠である、産婦に於て我計度の入らぬは親の力、卽ち他力に出るのである、今も我々が淨土に生るゝ準備は、阿彌陀如來の悲智の引手に御仕上け下されたのである、更に我計度の入らぬのは他力によるからである、酸物好く樣に成たも懷姙の印である、腹の脹れて來たも生るゝ子のある印である、疑ふ事は入りませぬ、御恩を知て稱名念佛を嗜む樣に成たも、往生治定の印である、御法を聞く度不足なく若不生者の御誓に腹の脹れたも、淨土へ生るゝ印である、何と有難ひ事でありませぬ歟、念佛往生と深く信じて稱ふるが目出度事にて候なり。

第七十三　仁の端を展開せよ

びか〳〵閃く大刀を拔て恐び入たる盜賊が、寢入込た夫婦の枕元に幼兒が匍出し火鉢の中へ手を入れ、眞赤な火を紅葉の如き手にて握らんとするを見ながら、其まゝにして置くであらふ歟、あれ可愛相に火傷するのも知らぬ幼兒よと、慈愛の一念は起るに相違なひです惻隱の心は仁の端なりといふは此事であらふ、物を掠め人を殺す事を職として居る强盜惡賊でさへ、刀を握りた手を明けて危險にかゝらんとする幼兒を除けて遣るものを二諦相依の宗義に育つ眞宗信者の身として、不仁の所爲を現はしてはなりませぬ、私一人は教示に背くまひと心得ますれども、多數の家庭中々六ケしふ御座いますと申さるゝ方もあるが、遠きは近きよりし高きは卑きよりすと、古語にある通り、何事も手許より致さねばならぬことである、多數の對

手を一時に一樣にする事は不可能の事也へ、自身一已より實行して進むことに決しませふ、自身が斯くまで仁義をもて向ふのに、何故彼等は不仁不義をもて我に向ふのであらふと思ふから、退屈の念が起れども他人の不仁不義ではなひ、未だ我の仁義が足らざるより彼に屈かぬのであると自省し、益々仁義を盡すのが得策である、畢竟彼れの不仁不義と我の仁義と競爭するのである、必ず最後の勝利は仁者義人に歸するのであります、其樣な競爭が出來るであらふ歟と怪むものなら、未だ佛願を信じ佛名を稱へて居らぬに違ひなひ、苟くも佛願を信じ佛名を稱へつゝ、王法仁義を守れよの宗義に育ち御用ひ申すものならば、觸光柔軟の利益ありて、自然と不仁を憐み不義をいつくしむ心が具はる故、決して右等のことは敢て六ケしくなく容易ならぬと思ひます、他力廻向を受た信心は佛心である、佛心

は大慈悲なり、大慈悲心中に不仁不義を憎む筈はなひ、固より怨親平等であります、

第七十四　鰻の說法

無宗教の人は未來を無視するのが常である、已が知らざるをもて無とするのであるまひ歟、曾て寓意談を聞た一節を擧てみやふ、某料理店の池洲に多數の鰻が養はれて居る、客の希望に應じて其内から引上げ料理に具ふのである、鰻の群中一個の識者ありて多數遊戯し居る所の鰻に對していふ樣、君等は將來身の收まりも知らず、浮かり〳〵として遊んで居るが、早晩人間の手に掛り肉と骨とを割斷され、加之金櫛或は竹櫛にさゝれて焰々たる猛火の上に燒かれねばならぬのであると說き出せは、群居せる鰻の多くが其樣な事があるもの歟、其說は虛僞である敢て聞くに足らず、祖先已來其事を告たる

ものなしとて、喧々囂々する際何の音なるやさぶんと響くと共に、一同ゐら〳〵と波にゐられたので驚て喧き聲が止んだ、且くして音響の何物なりしを徐々撿閲に取掛りたは識者の鰻である、多くの頭を並べ點呼したれば今まで居た鰻の某々が見にませぬ、大變なりと騒ぎ出した時分は此時遲く彼時速し、三個の鰻は脊を割られ腹を斷たれ終りたのである、鰻が知らぬをもて未來火焔に燒かるゝを信じなかつた鰻の無視したる爲め、料理店の鰻の蒲燒が廢止にはならぬ我々は娑婆の池洲に遊戯して居る鰻否人間である、何時料理店の蒲燒否未來は業火に燒かれねばならぬ事必定である、識者の鰻が說法に未來を警誡して吳ても、蒲燒になる災難を免がるゝ道は教へてなひ、我々は幸に苦患を救濟したまふ大慈悲の如來を未來の親とたのむ事が出來るのである、已が造りた業障がある故、業報免がれ難きは必然の道理なれども、無限の大悲は横超他力の業力をもて生るべからざる身を淨土へ生れさせて下さるのである、誰も彼も已が分限を辨へて知らぬ事は知らぬとして能く知りたまふ如來大悲の手にすかり救濟して頂きませふ。

第七十五　硝子越の聽聞

いかはかり聞ても有難くなひ喜ばれぬといふが、信徒の一癖であるが何故であらふ、美麗に陳列してある魚類肉類其他食物を見ながら涎流して更に味も香もなひといふから能く質せば、硝子隔てゝ見て居たのである、固より味といふものは舌頭に觸れねば分らぬが至當なれども、香ひのせぬ筈がなひと思へば、硝子をへだてゝ見たのみで有た、今も六字の由れを並べてみても、有難くなひ喜ばれぬといふは、健康なり壯年なりといふ硝子が故障と成て居るのであるまひ

歟、悟りの味は淨土へ至らねば分らぬが至當なれども、有難ひ嬉ひといふ歡喜慶喜はする筈である、いか丶で御座います。

第七十六　無我に法を喜べ

佛法を聽聞したる同行に法を喜ぶものと機を歎くものとの二類がある、機歎きは殊勝らしひ樣にあれども、一種の病氣であらふと思ふ此病氣は嚴しく機を責られた所より發りたに相違なひ、依て誤聞の咎を並べていひきかせるより正意のみを勸むるが宜ひと思ふ、轉迷開悟拔苦與樂の法を聽聞して、機歎きの病人と成ては遇法の甲斐がありませぬ、何々を買ひ來れといひ付れば、小兒はいひ付のま丶求め歸るのなれど、道にて開てみるな摘み食ふなよと入念するにより、何がある歎明けてみるなといひしが何じや知らぬ、摘み食ひするなといはれたが一つ食ふて見樣歎といふ氣が起るのである、小兒に物云ひ付るには餘りこせ〳〵せぬが宜しひのであります、佛法聽聞の同行には、其は善くなひ其は惡ひ其は違ふて居る其は不正であると、こせ〳〵責めますのは宜くありませぬ、只一筋に正道を案內さへすれば煩ひのなひ健全と無我に喜ぶ同行となります、固より本願一實の大道故、一人として歎くものはなひ筈である、貪欲瞋恚愚痴の身一寸先のみにぬ者未來となれば一歩も先へ進む能はざる智目行足の闕たるものが、大願業力爲增上緣と大悲の親の御蔭によりて心配なき事になるのに喜ばずに居れませふ歎、喜ばずには居れませぬ。

第七十七　輪藏の功德より一聲の念佛

傳大士といふ人がありた、元來儒家にて道教を尊び終に佛教を信じ三道を一人に究めた豪傑である、詩に儒冠道服釋袈裟和會三家作一

家といへるは此人を指したのである、此人の發明せられたが各本山始め經藏中に造れる所の輪藏であります、何の爲に輪藏を發明せられたぞと申せば、釋迦如來御一代の說法結集に成て現存せる一切經七千餘卷讀誦の功德は廣大なりと雖も、多くの時間を消費せねば出來ぬ事である、たとひ時間は惜まぬものありといふとも、之を讀誦する力なくば能はぬことである、依て一回輪藏を回轉すれば一切經を一回讀誦したる功德に似たるの道理を發明して造られたのである輪藏回轉の功德は一切經讀誦に類すと聞けば、心易き事にて多大の功德を得る樣なれども、一切經を所持する寺へ行かねば叶ひませぬ一切經所持の寺へ行ても輪藏に造りてなくんば回轉する事は出來ぬされば心易きに似て竟畢難ひ事といはねばならぬ、然るに我々は佛願を信じ佛名を稱ふるばかりにて、經藏を尋ね輪藏を轉する世話なく行住座臥をにらばぬ、時處諸緣をきらはず無量の功德の主とならるゝのであります。

第七十八　親の世帶は子の物

小借金に心配して顏の色のよくなひ忰は、未た親の世帶は子の物といふ位置に至らぬからである、一千圓の借金が有ても一萬圓の世帶ならば、顏の色替へる程のことはあるまひけれども、親の世帶は一萬圓にて子の借金は一千圓と離れて居るので心配があるのである、今も煩惱の借金に心配して後生が苦になるのは、如來と我とが離れて居るに由るのである、五刼の思案といふも兆載永刼の修行といふも、ひとへに親鸞一人がためなりと御喜びなされた、宗祖大師に御同心申してみれば、悲智無导の大心海阿彌陀如來の御世帶は私の物と喜ばれます、一千圓の借金も一萬圓の世帶の中を捌くとすれば造

作はなひ、八萬四千の煩惱も、不可思議光の世帶で捌て頂くとすれば造作も心配も入りはしませぬ、一萬圓の世帶の内で一千圓を差引く時は九千圓となれども、八萬四千の煩惱を不可思議光の世帶に投込めば世帶に減り目のみにぬといふ位ではなひ、益々世帶が大きくなるのである、其は道理に合はぬ樣なれども道理に合ひます所以は斯くの如くである熱湯中へ氷を投入すれば、氷は釋けて熱湯を增す如く我等が煩惱の氷を大悲の熱湯に投入すれば、煩惱は菩提の湯となるのであります、御恩を忘れてはならぬ。

第七十九　聞法の因緣輕んずべからず

安樂集に目連所問經を引でありますが、其經文に佛目連に告たまはく、譬へば萬川の長流に浮草木あり、前は後を顧みず、後は前を顧みず、都て大海に會するが如く、世間亦爾と說きたまひて、一萬里

も流るゝ川に浮流する草木漸々と流れ浮きつ沈みつして大海へ入るまでには、多くの日支を費すこと必定である、我等も六道に浮沈し今正しく人界に生を受け、宿善ありて弘願法に遇ふことは苟且の因緣ではありませぬから、空くせず其時限りの思ひにて聽聞し、佛意を得誤らぬ樣にせねばなりませぬ。

第八十　何處より來て何處へ行く歟

大無量壽經に、愚痴矇昧にして自ら智慧を以て生の從來する所、死の趣向する所を知らず、仁ならず順ならず天地に惡逆し、而して其中に於て僥倖を希望し、長生を欲めんと欲すれども、かならず當に死に歸すべしと說きたまひてありて、愚痴矇昧の大將は我々である斯く申せば世に智者よ學者よと呼ばれて居る人々は、何を云ふぞ今日の文明の社會開化の天地に育つもの、愚痴矇昧の者ばかりならん

やと、氣焰を吐かるゝであらふけれども、釋尊は壓制的に說かれたのではありませぬ、熟く熟考してみたまへ偶ま途中にうろ〳〵する人あり容貌愚なるが如し、汝は何れより來たぞと問へば知らずと答ふ、何處へ往くぞと問へば知らずと答ふ、之を愚といはずして何と名けませふ、今我等この婆婆へ何處より來たぞと問ふものあらば、確乎たる答が出來ませふ歟、母の胎内よりといふ位は小兒も答へられ樣が、其胎内へ何處よりと問ばゝ第二の答は難かるべし、婆婆を終らば何處へ往くと問はゞ、いかなる答を爲すであらふ、或は二類あるべし一は墓場へといふ位ならん、他は靈魂消滅といふ位なるべし、皆是經說の愚痴矇昧と呼ひたまふ大將株である、苟くも因果の道理を知らば、靈魂消滅などゝいはるゝものにあらず、彼由井正雪は甲斐の信玄の再來者で有たとの事を申し傳へます、いかにも左樣かも知れぬ、信玄は英雄なれども前には上杉謙信、後には今川義元中國以西に織田信長、齊藤龍興等ありて天下を併呑せんといふ宿志が遂げられなかつた、死に臨み生れ替りて一度は宿志を遂げんと大貪欲を起して終りた信玄の再來たる、由井正雪も徳川の太年世界へ生れながら天下を併呑せんといふ謀反を爲した、是全く信玄たりし過去にありての宿志が再ひ現はれたのであるまひ歟、總て因果の道理が消滅するものならば、放蕩無賴漢や殺人盜賊輩は大に都合よき事なれども、因果の道理は決して許しませぬ、登樓して呑めよ歌へよと藝娼妓對手に遊興に愉快を究めた結果、案外の書付〻高の金嵩に驚て呑だ酒の醉も醒め、懷中は輕し拂高は重し、身も心も消滅して仕舞度と思ふてあらふけれども、消滅しませぬ、我等一生涯惡事の酒呑み、無理の弦牽き三毒五欲の愉快を究め無明の醉に耽りて

居て、臨終に消滅せよ〳〵と注文しても、因果の道理が許しませぬ因あれば必ず果をみねばならぬ、果といふものは因によりて成立たものであります、己が見ざることをもて無となし、己が知らざることをもて無と爲す、いよ〳〵愚痴矇昧の大將と申さねばならぬのである。

第八十一　因果に背ひて僥倖を望む

青色の葉に生ずる蟲類は青くして、茶色の葉に住む蟲類は茶に成て居る、總て住居場の色に似た色を帶て居るのである、人は天地の間に住居するものなれば、天地に似たる所あるべき道理であるまひ歟天地は能く物を容れ、天地は能く物を載せ、更に私なきものである然るに不仁不順惡逆天地と說きたまふ如く、慈善の相談となれば破壞を企て、惡事の相談となれば尻押を圖り、自分勝手のみ思ひ計り

つゝ、而して僥倖を希望するとは餘りに横着であるまひ歟、某家の老母は寺參りの歸り路に風呂敷包を拾ふたるを警察署へ屆け出したが、包の中に二千圓ありて、遺失者から二百圓の禮を貰ふたといふ新聞を聞て、忽ち寺參りを思ひ立ち、嫁女よ私はねー御說教聽聞に參りて來ますから留守を宜しくと、平素聞法嫌ひの婆さんが勸め手もなひに出掛る寺參りは、二百圓の禮を貰ふ拾ひ物があらふ歟といふ野心より起りたのであらふと思はれます、寺參りして來ますといふ語は殊勝なれども、出掛る心の底は貪欲の大將が居て號令を掛たのである、我家を蹈み出し始めが貪欲の大將の號令に隨て出たのですもの澁ひ目を張り、何ぞ遺失物がありさふなものと向ふみずに歩行する色へ、電信柱に頭を打て傷をするやら自轉車に觸れて羽織を裂くやら譯もなき次第、羽織は仕立屋により、直し金を取られ、負

傷は醫師によりて藥料を取られ、拾ひ物する代りに損耗を爲したといふ有客、みな是因果の道理に背ひて僥倖を望むをらです、あゝ馬鹿らしひ事で有たよ不幸の者よと機が付くものは、先結搆の部類である、一つ間違ふこ調子外れが出來神佛を恨む樣になる、彼神佛は慈悲あるの尊こひのこいへこ、依怙贔負のあるものである、餘所の人には拾はせて私には拾はせて呉れなひなこゝ、小言いふ樣な事が起りて來ます、早く因果の道理を信知して、樂々世を過す樣に致しませう。

第八十二　我等は六根不通なり

眼力が強くして八十餘なれこも、眼鏡を用ひずに細字の新聞を讀むこ誇る人もあり、若き時は七十過ぎた今日も耳に替りがなひこ、耳の遠くならぬを手柄顔する人もある、何れも老人は似合はぬ健康者

誇りこするも尤千萬なれこも、其眼こいひ其耳こいひ遠きに及ばず且つ近きに功なきものである、海面を遠きに望めば天水相接續してみゐませふ、是眼力の屆かぬ故である、自己の睫毛がみゐますまひ是功用の薄き故でありませふ、遠きをみる能はず近きをみる能はず誇るに足らぬであるまひ歟、耳も三里五里以外の砲聲を聞くこ雖も十里二十里外を聞くこはいひ難からふ、耳朶に接近してわ！こいはゞ聲大きくこも辨じ難ひでなひ歟、況や口内にこそ〳〵いふ聲に於てをやである、鼻に香ひを辨ずるのも、遠きを感するここ叶はず、近き鼻口に於て亦感得する事薄しされば、遠近の中間を辨ずるのみそれも火繩を振り回すここ早き時は旋火輪こみれこも、點火にして間斷あるものを見定められぬのである、時辰器の内容をみても動くに遲速あり、其速かなるものは知得すれこも、大輪の回り遲きもの

は動かぬ如くにみゆる、されば全速をみす全遲をみすといはねばならぬ、如是の身に三明六通無导自在の證を得させんと呼びたまふ如來の勅命、速に信順して報土往生遂くべしである愉快の事でありませふ。

第八十三　信專行專方專

信心を云はゞ無疑の一心なり、行業をいはゞ念佛の一行なり方角を云はゞ西方の一角なり、是を名けて信專行專方專と申すのである、たとひ口に一向と稱しても、心が他方に向て居るならば眞宗の同行にあらず、然れば方專といふ時は西方にばかり向ふて居らねばならぬの歟といふに左樣ではなひ、都合によりて姿は何れになりとも向はゞ向へ、心を西に向けるのであります、心を西に向けると申すは稱名念佛するに如くはなひ、姿も勝手とはいひながら成るべく、西に向く樣といふ心得があれば常に西向きが多くなるでせふ、熊谷蓮生坊吾妻下りの逆馬といふ事は、今猶喧傳されて居りますから知らぬ人はなひ位です、歩行する時は東に向て西を脊にせねばならねども、馬に乘れば馬が歩んで行くに任す身なる故、西に向ひませふとて、東に向ふて歩む馬の脊に西向きと成て乘たが蓮生坊である、其時の歌に「淨土にも剛の者さや沙汰すらむ西に向ふて脊ろみせねば」と讀だと申す事である、其意を考ふるに有難ひ勿體なひ、西に向はずに居れぬといはずに頭は剃ても、猛き武士の敵に脊をみせざる昔の心が殘りて居て、今も西に脊をみせぬの歟と、淨土の彼方に沙汰せらるゝならむといふたが面白ひ事であるまひ歟、一寸御話が辷りました宥怒して下され、さて前に申します通り心を西に向けるの術は、稱名念佛するに如くはなひのですが、此術を行ふて居られます

や否と問ふ人あらば、善き答へが出來ます歟、終日職業に奔走し多忙に暮しても夜に入り寢室に臥すときは、姿こそ横になれ、心は西に眞向きとなり、親心を思ひ浮べて念佛申しますと、明言を發する事が出來ます歟、怪ひものでありませふ、先第一寢てから思ひ浮べるのは煮染の鍋蓋に押を置くべきを忘れた、鼠が口をさゝねばよひがといふ樣な淺ましひ心でせふ、西向きではなひ鍋向きといふ心である、御法廡に列りた時は十分に念佛相續するかといへば一廡〳〵の間には留守居の嫁が留守事にうまい物して喰はぬ歟と案じる婆々さんやら、昨日歸らるゝ筈の良人が歸りのなかたは、青樓に藝妓と遊んで居るのでなひ歟と案じる嫁さん、何と是等を西向きと申されませふ歟、我を忘れて衛生會議に時間を移し歸宅の遲くなりし人を茶屋遊び藝妓狂ひと燒餅やき、番茶一杯も呑まずに留守を堅く預かりて居る嫁をうまさ喰ひして居るならむと恨む如き、一向專修とは名けられまぜぬ、藝當ばかりである、氣が付たら慚愧して佛恩を仰ぎ稱名念佛いたしませふ、風の强弱によりて浮沈昇降はあれども、糸さへ切れねば凧は落ませぬ、御法緣に遇ふと家事に纏はるゝとの差によりて、御恩を仰ぐに强弱あれども、一念歸命の信心決定の身は淺ましきに付、いよ〳〵南無阿彌陀佛〳〵と、往生の凧の落る氣遣ひなしであります。

第八十四　口に積る懈怠の塵

佛恩報謝の要行は、稱名念佛なることは眞宗の定則也べ、和讃には彌陀大悲の誓願をふかく信ぜん人はみな、ねてもさめてもへだてなく南無阿彌陀佛と稱ふべし、と仰せられ、蓮如上人も、かくの如く決定しての上には、ねてもさめても命のあらん限りは稱名念佛すべ

きものなり、と仰せられてありますす、然るに多くの人が稱名念佛を報謝の裾に置き稱へずとも宜しひ位に決して居る、大なる誤りであります、嫁し付た娘の許へ行て、孫を對手に笑ひ話酢よ粹よと日々御恩は打忘れ、一周間も經て我家へ歸り久々にてと獨語いひながら御佛檀の御戸を開けば、締込まれた鼠が飛出たのに驚て、あーと叫んだを嫁は聞て其聲に驚き、いかゞなされたと近寄れば、何も角もあるもの歟、此御佛壇の有容、御花は散り香爐は覆へり和讃箱の上は灰にて雪の降た樣に成て居る、一周間留守にしたら此樣な事如來樣に申譯がなひ、何を御詫を致してよからふ、あーあーと泣聲造りて悔るのはまさか嫁の面當にする狂言でもあるまひ、實に心底より申譯がなひといふたのであらふか、夫なら省みて貰ひ度事がある、申譯がなひといふのは、花が散たり灰が飜れたりして有たので御報謝が懈怠に成た事を悔るのでありませふ、左樣なら一周間娘の許に孫對手の滯在中、懈怠した御報謝があるのに氣が付ませぬ歟、我家へ歸らずとも出來る御報謝、殊に肝要なる大行、何時何處でも務めらるゝ稱名念佛を一周間口にしなかつたのは懈怠であるまひ歟、口に積りた懈怠の塵でありませふ、此塵を拂ふといふ事に氣の付かなかつたは眞に申譯のなひ次第である、既往は咎めず遂事は諫めず、今後は皆共に彌陀大悲の誓願をふかく信じて、後生に案じのなひ身となり、ねてもさめてもへだてなく南無阿彌陀佛を稱へながら、親は親の仕業を務め、子は子の本職に勉强し、夫婦兄弟親族朋友家僕家婢まで其分を守り、淨土行の道中を致しませふ。

第八十五　月を見る人月を見ぬ人

月は出たりと聞て、一人は月あるもの歟と、肯んせず一人は何處に

出たりや見になひ〳〵と、屋内を繞りて月を搜索せり、一人は屋外へ飛出し教ふる人の指をみて、月と合點したり、最後の一人は教へ手の指によりて、東山に昇る月を見認め清快を呼で喜べり、此四人の中初めの二人は月に就ていふときは、有る筈なきの人なれども、因果撥無の人は第一の類である、信心〳〵と我胸を搜索する人は第二の類である、聖教の文句に拘泥して執する人は第三の類である、教示を受たりと雖も、敢て文句に拘泥せず、曇りなき佛願の明月を仰ぎ、己れ忘れて六字を吟ずるが第四の類であります。

第八十六　大悲の攝取蛔

攝取心光常照護とあれども、拜見した事もなひと申す人が有た、成程光明とあるから、ひか〳〵閃きが眼に輝き映する事もありさうなものと思はるゝであらふが電氣燈や洋燈の明りとは違ひます、强ひて見度ひとあらば見ゆる邊もなひではなひ、攝取をみるみざるに就ては、聖教上此所彼所搜した事もあります、源信和尚はみにぬと仰せられた事が判然である、我宗祖大師は敢て源信和尚の向ふを張て反對に立つといふ思召ではなひか、別に見ゆる事ありと教へて下されました、源信和尚は見兼ぬ御身の上なれども、我等凡夫に同して我亦在彼攝取中煩惱障眼雖不見とのたまふ、我宗祖大師がみゆるとのたまふ所以は、光明とて眼にみるものと限るのではなひといふことを知らせて下されたのである、和讃に十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつる、又は往生に疑ひなきは攝取せられまいらせぬるゆへとみにて候と、仰せられてあります、信心決定してから、徐々攝取にあづかるといふに非ず、信心のさだまるといふも往生のさだまるといふも、只是攝